96－360

高木壬太郎著

# ウエー傳

東京　警醒社書店

# 序言

是れ著者がジョン、ウェスレー誕生二百年を紀念せんため著はせる紀念的著作也。

サウセー曾て論じて云く、『若しウェスレー微りせば、他の預言者出で來りしなるべし、當時メソヂズムは既に空中に浮颺せり、故に何等かの形狀を取りて現出せざる可らざりし也』と。夫れ或は然りしならん。然れ共メソヂズムを形成したりしものは、疑もなくジョン、ウェスレー也。メソヂズムありてウェスレーありしに非ず。ウェスレーありてメソヂズムありし也。偉人は風雲に乘

ず、然れ共風雲は獨り偉人を生せず。彼は寧ろ時勢の指導者也、國民の案内者也。吾人はウエスレーを外にしてメソヂズムを解釋するを能はず。今やメソヂズムは大なる成功を以て世界の各所と各方面とに擴り、其勢滔滔として底止する所を知らず。抑も此の如き大運動は如何にして發生し、如何にして發達したりしか。之を知らんとする者先づウエスレーを學ばざる可らず。

然れ共ウエスレーは獨りメソヂスト教會の私有すべきものに非ず。彼はルテルが第十六世紀に於ける宗教改革者なりしが如く、第十八世紀に於ける宗教改革者



なりき。第十六世紀の宗教改革は不當なる克己鍛錬の教訓に反對して起れり。信仰は其標語にして、ルテルは久しく埋沒せられたりし『信仰に依りて義とせらるべし』この教理を闡明したりき。然れ共是れ聖書の全教訓に非ず、ウエスレーはルテルと共に『信仰に依りて義とせらるべし』この教理より入りたりしかども、彼は之を以て底止せず、遂に基督の宗教とは愛に外ならずこの點に到着し、愛の福音を宣傳して以て未だ完備せざりしルテルの宗教改革を完備したりき。彼が宗教改革は之に依てメソヂスト教會を起したりしのみならず、宗

教の眞意義を發揮して光明と生氣とを凡ての教會に皷吹したりき。故に凡ての教會は又ウエスレーを學ばさる可らず。

語に云く、『人間を適當に學ぶは人を學ぶに在り』と。吾人謂えらく宗教を適當に學ぶの道敬虔熱誠なる宗教の人を學ぶに若くはなしと。高潔なる聖徒、偉大なる宗教家の傳記は具体的に宗教を教ふ。宗教の眞味を會得せんと之に若くもの勿るべし。夫れウエスレーは敬虔なる聖徒にして又偉大なる宗教家也。彼が敬虔なる家庭に生れ、幼時より宗教的教育を受け、長じて父の牧會事業を助け、米國に航して自ら傳道に從事したりしも尚心に平安を得ること能はず、永遠の生命は彼の爲めに其道を閉し、天上の明星は彼の爲めに其影を隱し、暗黑、畏怖、悲哀、憂鬱の中に苦痛煩悶して殆ど其半生を費せしも、一旦豁然として大悟するや、彼が嘗て見ること能はざりし眞理の光明は瞭々として彼の眼に輝き、彼が內心は霹靂一聲耳を劈き、驟雨一過天地を洗ひ清め、夕陽西山一點の塵を止めざる底の光景を實驗したりしが如き、是豈宗教を信ぜんとするもの、先づ學ぶべき所に非ずや。然り、彼が一生の經驗は吾人神を信ずる者、模

範とし、教訓として學ぶべきものに非ざるはなき也。

著者は此の如き偉人の適當なる傳記の未だ我國に之れなきを憂へ、彼が生誕二百年に方り、簡明なる傳記を著述するの必要を思ひ、本年一月稿を起し、今漸く脱稿せり。教務多端の中に成れる者、其完備のものに非ざるは論なし。唯聊かにても如上の目的を達し、讀者をして此偉人の面影を窺ふを得せしめば、著者の幸福素より大也。

著者は此書を著述するに方り、スチーブンス氏『メソヂスト教會史』、マシウ、レリエブル氏『ウエスレー傳』、エフ、ジエー、スチル氏『ウエスレー及びメソヂズム』及びウエスレー說教集、ウエスレーの日誌、書簡、文集、其他ウエスレーに關する新聞雜誌の記事論文等を涉獵せり。然れ共著者はマシウ、レリエブル氏『ウエスレー傳』の簡明にして直截なるを喜び、多く同書の記事に從へり。

此書を著述するに方り樋口昌直氏は著者に助力を與へられたり。是れ著者の深く同氏に謝する所也。

明治三十六年(千九百三年)十月廿三日駒込西片町の僑居に於て

著者識

# ジョンウエスレー傳

## 目次


第一章　第十八世紀初代の英國　一……二二

第十七世紀の終より第十八世紀の初に於ける日本。英國宗教改革の不完備。清教徒運動。第十八世紀に於ける英國。外部の繁盛。上流社會の腐敗。下等社會の墮落。改善の企劃。文學者。風俗改良會。宗教的團体。英國教會の僧侶。其冷淡、不道德。彼等の説教。敬虔なる個個の証言。非國教徒。ボルテーアの批評。ボルテーアとウエスレー。

第二章　幼年及青年時代　二二……四〇

（一七〇三年―一七三五年）

エプウオス。ジョン、ウエスレーの生誕。其父祖。サムエル、ウエスレーの性行。スザンナ、ウエスレーの性行。家庭教育。牧師館の失火とウエスレーの避難。其幼時

の敬虔。チャーターハウス學校に於ける彼。オツクスフオルドに於ける彼。彼が當時愛讀の書。執事の按手。リンカンカレツヂの校友。希臘語の教授。チャーレス、ウエスレー。メソヂストの濫觴。エプウオスに於けるウエスレー。ホイツトフイルド。ウエスレーの疾病。精神的狀態。

第三章　米國傳道、失敗及新生　四〇……六一

（一七三五年—一七三八年）

エプウオス教區の請求。米國渡航。大西洋上。モラビヤン人とウエスレー。米國上陸。モラビアン教師との交際。印度人傳道。殖民傳道。協會の組織。失敗の原因。反對。歸航。精神上の危機。ベーラーの感化。悔改新生。獨逸旅行。メソヂズムとモラビヤン人。

第四章　メソヂスト運動の開始　六二……八〇

（一七三八年—一七三九年）

ウエスレー國教會に說教す。國教會其講壇を鎖す。牢獄訪問。千七百三十九年の新年。ホイツトフイルド野外に說教す。ウエスレー之に倣ふ。ブリストルに於けるウエスレー。協會の組織。第一の會堂。巡回傳道の光景。驚くべき悔改。カンターベリー大監督とチャーレス、ウエスレー。ブリストルの監督とウエスレー。

第五章　內部の分裂外部の進歩　八〇……一〇五

（一七四〇年—一七四二年）

モラビヤン人の誤謬。ウエスレーの分離。ウエスレーに對する人民の感情。ブリストル及倫敦に於ける一撲。國教會の僧侶。協會の發達と擴張。ウエスレーとホイツトフイルドの紛爭。分離。困難なる問題。平信徒說教家。子ルソンの働。ウエスレーの北部旅行。エプウオスに於けるウエスレー。スザンナ、ウエスレーの死。

第六章　衝突及迫害　一〇六……一三二

（一七四三年—一七四四年）

北部に於けるウエスレー。方區の組織。倫敦に於ける迫害。チャーレス、ウエスレー亂民に襲はる。ウエンズベリー、ヴオルサル、スタツフオルシーア等に於ける迫害。官吏と僧侶。ウエスレーに關する輿論。年會の組織。先決問題。教義。說教の方法。英國教會との關係。條例。小會。平信徒の說教。ウエスレーの權威。年會の

閉會。事業の狀況。人々のウエスレーに關する觀。官吏と僧侶の反對。

第七章　事業の發達　一三二……一五八

（一七四四年—一七五〇年）

ウエスレーオツクスフオルドに說教す。彼の使命。旅行の困難。コーンウオル。ウエスレー捕へらる。フアルマウスの亂民。ウエールスに傳道す。軍隊及戰陣に於けるメソヂズム。ウエスレーの愛國心。基督教文學の必要を認む。不健全なる信仰の侵入。南西地方に於ける進歩。北部に於ける成功。プリマウスの迫害。コーンウオールに於ける變化。愛蘭の傳道。其結果。迫害。ウエスレー第二回の愛蘭行。其成功。コークに於ける迫害。愛蘭に於けるメソヂズムの成功。

第八章　長足の進歩　一五八……一八一

（一七四八年—一七六〇年）

英國教會の僧侶。フレツチャー。『僧侶に贈る文』。コーンウオールに於けるメソヂズム。蘇格蘭に於けるウエスレー。英蘭に於ける事業の進歩。反對の減少。亂民に對するウエスレーの態度。內部の紛亂。ウエスレーとホイツフイルド。ウエスレーの活動。平安。節儉。慈善。彼の獨身論。彼と戀愛。彼の婚姻。孥悪不調和。疾病。著述。

第九章　全盛の時代　一八一……二一〇

（一七六〇年—一七七〇年）

ウエスレー六十歲に垂んとす。基督教的完全の教理。信仰大復興。其效果。不健全なる分子。一般の狀態。ウエスレーの會衆に對する權威。官吏の厚意。僧侶の反情及反對。米國メソヂズムの建設。ホイツトフイルドの死。年會に於ける教義上の議論。英國教會に對する態度の變遷。教職採用に關する規則。彼等の教育、旅行傳道、克己。協會の狀況。

第十章　老年時代　二一一……二三七

（一七七〇年—一七八〇年）

ウエスレー古稀に達す。其健康、活動、快活。世人の尊敬、悔改。英國に於ける宗教及社會的進歩。蘇、愛に於けるウエスレー。事業の狀態。上流社會及僧侶の態度。ウエスレーと協會。ウエスレーと傳道。ウエスレーと貧民。ドクド博士。シチーチ

ヤベル。出版。神學上の爭論及結果。

## 第十一章　晩年の十年　二三八……二六五

（一七八〇年―一七九〇年）

ウエスレーの健康尚衰へず。世人の尊敬。說教の効果。コーンウォール。愛爾蘭。人望。彼と小兒。彼と日曜學校。和蘭、チヤンネル島への旅行。フレッチーの死。チャーレス、ウエスレーの死。米國に於けるメソヂスト教會の進歩。英國教會との關係。獨立戰爭の影響。事情の必要。米國美以教會の建設。英國メソヂズムの地位。條例の批准。

## 第十二章　終焉　二六五……二九七

（一七九〇年―一七九一年）

老衰。倫敦及其附近に於ける働。最後の北部旅行。蘇國に於けるウエスレー。八十七歲。最後の年會。倫敦及附近に於ける說教。日誌の絕筆。會計簿の絕筆。在米友人への書簡。最後の說教。衰弱益々進む。ウイルバーフォースへの書翰。最後の日曜日。最後の言。終焉。葬儀。紀念碑。

## 第十三章　性行及事業の効果　二九七……三二一

八面是眼的の人、完全の人。人としてのウエスレー。彼の誠實。彼に對する非難。祈禱の人。暖き人にして激烈の人に非ず。目的に執着せり。簡約清潔の人。寬大と廣量の人。和氣靄然たる人。其機智と諧謔。說教家としてのウエスレー。何が故に說教家となりしや。講壇勢力の秘訣。彼が說教の特色。其雄辯と感化力。著作家としてのウエスレー。彼の著作。彼は建設者也。彼の神學。彼の宗敎。敎會の組織。國敎會及非國敎會に及ぼせる感化。英國精神的社會の改造。政治上に及ぼせる影響。其他に及ぼせる感化。世界的運動。

## 目次終

# ジョルジュ、ワシントン傳

高木壬太郎著

## 第一章　第十八世紀初代の英國

元祿十一年柳澤吉保、左少將となる。將軍綱吉漸く政に倦み愛憎意に任せ吉保を寵す。吉保寵を恃み政を私して驕奢を極む。寶永六年綱吉薨じ、家宣入て統を繼ぐに及び、吉保を黜け、新井君美の博識に して經世の才あるを信じ、之を用ゐて大に幕政を振興せんとせしが 在職四年にして薨じ、君美亦老中と議協はずして退くに至り、其業 半途にして止みぬ。家繼、吉宗相次で軍職を嗣ぎ、廣く人材を登用 し、鋭意改革に從事せしが、太平の久しき制度典章は徒に繁文褥禮

と變じ、曾て天下を震駭せし三河武士は漸く長袖寛帶の青公卿と化しき。民間の風俗亦漸次奢侈に傾き、百事放佚自在となりし極、驕奢豪遊至らざるなく、半宵の夜會に數百金を費すが如きは珍らしき事に非ず。而して驕奢は淫佚を意味す、千代田城の大奥に榮華の春を誇りし阿傳の方が英一蝶に朝妻舟のあさましきを歌はれ、宮女繪島が增上寺詣に浮名を山村座の觀劇に流せるが如き、以て當時風俗の如何に頽廢せしかを見るべし。

世界の治亂興亡は屢々時を同ふす。第十七世紀の終より第十八世紀の初代に於ける日本が、太平打續きて上下驕奢逸樂に耽りしが如く、西の方凡そ一萬哩を隔てる大英國も、カーライルが虛僞及び假面の時代、放蕩及び破產の時代、欺騙及び食言の時代、盲識及び自殺の時代也と罵倒せしが如く、人心漸く太平に狎れて道德弛廢し、紀綱紊亂したりき。いでや今第十八世紀の初めに於ける英國道德、宗教の狀態を語らん。

第十六世紀に於てルテルの初めたりし宗教改革は歐羅巴全洲に其餘響を及ぼし、英國の如きも亦プロテスタント教を受け入れたりしが、元來英國民は保守的の人民にして、急激の變革を好まず。從て其宗教改革なるものも唯一部に止まれり。而してプロテスタント教を初めて英國に入るゝことに盡力したりしはヘンリー八世にして、次て女王メリーの手に移り、更にエリサベスに至り、ジエームス一世、チャーレス一世、クロンウエルの共和政治等を經て、ウエスレーの時に至りしが、不幸にして英國の宗教改革は常に政治運動と關聯し、其保護の下に成長したりしを以て獨立の精神に乏しく、其改革の如きも根本的に非ずして、舊物と調和するの傾向を免れず。此の如く

して羅馬舊教の立てたる教主管轄主義は依然として採用せられ、其教義さへも尙舊教に據れる形跡を存せり。而して當時プロテスタント主義を採用せる宗教家なるものは、多くは無學無識の徒にして、エリサベス朝の時代に在ては宗教家にして讀書し得る者は甚だ少かりしと云ふ。彼等生活の狀態も亦誠に憐れなる者にして、サウセーの傳ふる所に依れば、彼等は裁縫師、指物師、給仕人等の職業をなして口を糊したりしといふ。マコーレー卿の如きは彼等は自ら農業を營み、若くは牧豚者となりて生活し、豪富の僕婢より冷肉の一斤、麥酒の一杯を振舞はるゝを以て無上の幸福となすが如き境界に在りたりしと云へり。從て彼等の道德及び宗教の狀態なるものも亦憐れむべき者にして、彼等は其貴重なる職務を行ふ才能を有せざりしのみならず、又更に敬虔の念なかりき。此の如きもの實に當時プロテスタントの精神を國民に鼓吹すべき任務を有する宗教家なりき。英國に於ける宗教改革の頓挫したりしも亦偶然に非ず。

清教徒（ピューリタン）の運動なるものは此不十分なる宗教改革に反抗して起れるものなりしが、不幸にして、此運動は少數人士に限られ國民一般に及ばざりき。而して是れさへ政治的騷擾の中に混同せられたりし爲め、忽ち其特質を失ひ、勢力長く振はず、第十八世紀の初に至ては國教會と同じく萎靡不振の狀態に陷りたりき。此の如く英國に於ける宗教改革の運動は不完全のものなりしが故、第十八世紀の初に至り國民の道德、宗教上の狀態は著しく腐敗するに至りしが、第十七世紀に於ける政治上の爭亂も亦此結果を來すに與りて力ありき。之を皮相より觀察すれば、第十八世紀の英國は繁榮を極めたりしが如く見えたりき。之を外にしては英軍はマルボローの指揮の下に西

佛の軍と戰つて頻りに勝利を得、之を内にしては、ジョンソン、アヂソン、スウイフト、ポープ、ヨング、グレー等の文學者輩出し、又ニユートンの如き大理學者出でて理學上の大發明をなしたりき。然れ共一たび此等外部の狀態より去て、社會内部の有樣を見れば、宛も白く塗りたる墓の、中は骸骨を以て充されたるが如く、腐敗は既に膏肓に入り、神もし攝理の手を下して之を救ひ玉ひしに非ざれば、英國は根抵より滅亡するより外なかりし也。

當時英國の道德が非常に腐敗したりしことは公平なる歷史家の共に承認する處也。元來貴族なるものは何處にても腐敗せるものなるが、當時英國貴族の墮落は實に甚しきものなりき。王室の如きも此腐敗を免るゝ能はず、賭博、淫行は盛に宮中に行はれ、從て王室の威嚴も地に落ち、千七百廿九年英國を漫遊せしマルチノーをして、



『王威日に萎靡しつゝありと』云はしめたりき。當時賄賂授受の風盛に行はれ、隨て主義を變ずると云ふが如きは敢て珍奇の事に非ざりき。マールボロー侯は當時有名の大將なりしが、何れの黨派に身を賣るをも厭はず、彼は曾てオレンジ侯ウイリアムより金を得て、ジエームス二世を賣り、又ジエームス二世より金を得て、ウイリアムを賣れり。否、彼は敵と内通する事さへも更に意に介せざりし也。當時最も有名なりしボリングブローク、シリユースベリー、ラッセル、ハリフアックスの如きも、或時はスチユワーツ朝に事へ、又或時はハノーバー朝に事へ、兩者より賄賂を得て、常に首鼠兩端を持したりき。ロバート、ワルポールは十五年間の久しき首相の地位に在りしが、同じく道念の乏しき人にして、彼は人の良心を買ひ得る力を有せりと云ひて自ら誇り、而して自己の良心の價格を高價に見

積りたりき。當時の國會議員なるものは、何れも賄賂に依て動き、內閣は賄賂を以て彼等を操縱したりき。此の如く金錢を欲する心は凡ての人を支配し、貴族、大臣は扨置き皇太子に至るまで、金錢を得んために投機の事業を營むに至れり。佛國と雖も諸惡の行はれざりしに非ず、而かもモンテスキュートは此有樣を見て、『此國に在ては金錢は全能也、名譽と德とを顧みるものなし』と云ひたりき。亦以て當時腐敗の有樣を推知すべし。又飲酒放蕩は當時盛に行はれ、人皆之を以て誇るべきことと思惟せり。故に一夜を飲酒放蕩に明したる者は、翌朝之を婦人の前に語り、婦人も亦之を聞て毫も恠まざりしと云ふ。當時の戲場が卑猥の空氣に充ちたりしは云ふ迄もなし。當時の文學も亦卑猥の有樣を寫すに努め、家庭も、敎會も共に紊亂したりき。當時上流社會には人心を維持すべき宗敎なる者あるなし。



故にモンテスキューは此有樣に就て述べて、『英國には宗敎なし、下院議員の中四五名は日々祈禱を爲す。人若し宗敎に就て語るものあれば各人之を笑ふ。人あり、余の前にて「余は信仰箇條を信ずるが如く之を信ず」と云ひしに、人皆吹き出せり』と云へり。不信は實に當時英國貴族の狀態にして、又此不信を鼓舞せるものありき。即ちボルテーアの友人にして、テーンの評して、『嘲笑的懷疑家、良心、婚姻及び誓約の賣買者』と云ひしボリングブローク卿、想像を逞ふし、虛僞の辭を以て基督敎を攻擊せしコルリンス、當時の國會をして尙其害毒を恐れしむるが如き文書を公にせしチンダル、及びスウイフトが『憐れむべき詭辨家』と評せしトーランド是なりき。

上の好む所下之れより甚しきはなし。上流社會の墮落旣に此の如し、故に、國民一般の腐敗も亦甚しく、殊に大都會に於て甚しかりき。

彼等の殊に欠如たりしものは秩序にして、政府も殆ど之を制すること能はざりき。故に彼等は乘ずべき機會あれば、何時にても騷擾を起し、途上に於ける毆打殺傷は甚だ珍らしからざりき。殊に國民一般が反對したりしは羅馬教徒及び非國教徒にして、此二者に對しては彼等は常に兇暴を恣にせり。當時『モハウクス』と稱する無頼少年の一團倫敦市中に横行して、或は行人を傷け、或は婦女を姦することを以て快樂としたりき。故に日没後は人恐れて外出せざりしといふ。亦以て秩序の如何に紊亂したりしかを推知すべし。

又當時飲酒の風盛に國民の間に行はれ、倫敦市中を行くもの、何人も醉倒者を見ずして往くこと能はざりき。而して是れ唯獨り大都會に於て然りしのみに非ず、地方に於ても亦均しく飲酒放蕩行はれ、而して村落に至ては更に野蠻にして、又迷信を伴ひたりき。殊に當時教育未だ普及せず、國民一般無智無學なりしは吾人の記憶すべき處也。

メソヂスト教の起りて其形勢を一變したりし以前の大英國民は實に以上述べたるが如き狀態にして、全國民は腐敗の極に達し、新生命入り來るに非ざれば滅亡を免れざりき。近世の著述家がウエスレーの出でたる時代の大英國は、全然異端邪宗の左右する所なりしと云ひたりしは決して過言に非ず。

然らば斯る狀態を救濟するに何者も起らざりしやと云ふに、吾人は之に答へて甚だ僅か起りたるに過ぎざりしと云はん。吾人は今メソヂストの大運動に先ちて企てられたる改革の計劃を略述すべし。當時の文學は國民腐敗の渦流に卷き込まれ、詩歌、小說、劇場の如きも腐敗の空氣を傳播するのみなりしが、斯る中に嶄然頭角を擢で、

濁流に抗し百川を障へんと試みたりしは、スチール、アヂソン、バークレー、ジョンソン等なりき。彼等は定期刊行物を發刊し、諷刺嘲笑の筆を用ひて、忌憚なく當時の弊風に鞭撻を加へ、大に好評を博したりき。吾人は之に依て時風を想見するを得べしと雖も、彼等の所業には皮相的の嫌を免るゝこと能はざるものありき。彼等は弊風を熱罵して當時の腐膓漢を慚愧せしめたりしと雖も、其弊風を掃蕩すること能はざりき。單に文學に於てのみならず、第十七世紀の末には甚だ注目すべき諸種の運動勃興せり。吾人は之に由て英國民の一部には尚腐敗の濁流に抗するの念ありしを認め得べし。其運動の一は國教會員の有力者が團体を組織し、法律の力を借りて弊風を一掃せんとしたりし事にして、此運動は漸次波及して、教會並に國中の高貴なる人々の庇護を受け、メーリー女王も亦之に加はり、罪惡を抑壓する爲に古き法律を活かして嚴重に行ふ可き命を下したりき。此弊風矯正會は此の如き保護を受けて、社會の根底に伏在せる罪惡の根源を除去するに多少の功あり、法律の力を借りて大いに行政上の助けとなり、殊に倫敦に於ては幾多の惡評ある家を鎖ざゝしめ、浮浪人及び酒狂者を捕へ來りて、或は罰金を科し、或は禁錮に處し、或は刑吏をして笞罪に處せしめたりしが、此等の事は畢竟是迄公然行はれたりし罪惡を秘密に行ふに至らしめたるのみにして、國民の道德を復舊するには殆んど何等の功果無かりしのみならず、彼等は下流社會の罪人は罪したりしかども呑舟の魚を洩らしたりき。故にロビンソンクルーソーの著者デフォーは之を小さき蠅のみを捕へて大なる蠅を遁す蛛網に譬へたりき。されど國民の良心がかく覺醒し來りし事は有望なる徵候にして、德義の衰頽に對する强力なる反抗

なりき。

此事業と密接し、少しく之に先ちて小なる宗教的團體英國教會のホーネック、スミシー、ベベリッヂと云へる三人の敬虔なる僧侶に由りて組織されたりき。多數の青年は此團體の働きに由りて改宗し、一週に一度會談して相互の修養に資する事を決議し、彼等は此決議を實行したりしのみならず、財貨を醵集して慈善事業に散じたり。彼等はまた病人及び罪人を訪ひ、兒童を教育し、彼等の勤勉に由りて倫敦及び其附近に百に達する學校建設せられたりき。此の團體の事業は小部分に限られたりしかども、一時は熱心なる宗教的活動の中心は此團體なりき。若し此團體に一層進取的冒險的の性質有りしならば、半世紀以内に國民の宗教心を勃興せしむる事を得たりしならんも、不幸にして彼等は僧侶の權利を侵害するを恐れて、適切なる



意味の福音的大活動を試みざりき。時にウエスレー出で、彼等の消沈せるを見て、新鮮なる生氣を注入せんとしたりし也。もしウエスレーにしてホーチックの思想に負ふ所ありとせば、彼は之を發達せしめて層一層有功ならしむる樣に利用したりし也。

此等の宗教的團體は自ら宗教上の大活躍を起さゞりしかども、活動の爲に途を坦かにしたりしは明也。此等の團體が存在し且繼續したりし事は、暗澹たる黑雲四面を鎖ざせる時にも、太陽の光輝は何所にか照るが如く、假令如何に罪惡蔓延するも眞正なる宗教の感化は何所にか及ぶ事を證するもの也。英國教會の僧侶等は大いに此等の運動を奬勵し進歩せしむ可き者なりしが、悲哉彼等に此事の爲され能はざりし事は、彼等宗教上の狀態を一瞥すれば明也。

當時彼等はマコーレーの所謂大家の僕婢に讓らざる狀態よりは遙か

に進み、寺領を回復し、豐かなる俸給を得て、懷は充分に肥え、青年等も僧侶となりて名譽と幸福との伴へる位地を得ん事を競ひ求めたりしが、彼等の道德上幷びに宗教上の性質は、社交上の地位の進歩に伴はざりき。彼等は廢朽せる教義等に何等の注意を拂ふ必要なかりしが故に、各々其の慾情の趣く所に從ひ、世人の耳目を聳動する如き不德義の行爲を爲さゞる牧師を有する教區は幸福と見做さるゝ程なりき。當時の牧師等が不德義なりし事の證據は歴然として蔽ふ事能はず。千七百二十六年英國に漫遊したるボルテーヤは『英國教會の僧侶等は居酒屋に出入し、當時の風習は之を是認し、彼等が痛飲する事あるも何等の不名譽をも來たす事なし』と云へり。かくの如き證跡はウエスレーの著述の中にも散見せり。

僧侶の中にも多少德望の優れし者なかりしに非ず。徒然にして學に志せる人々は、身を文學の講究に委ぬ、又當時の民心を動搖せしめたる政治問題等を研究する事を得しならんも、彼等は此等の事を俗人の手に委ね、スターン、スウィフトの如き僧侶の著述家の如きも、一時病者の欝を散ずるに過ぎざる物のみを著はし、當時の社會へ健全なる思想を注入する事を企てざりき。彼等が日曜日に信徒に向つて說教する所は到底彼等の職に適切なるものに非ざりき。かゝる一般の衰頽は所に由つて異り、且ベリッヂ、ホーチック、スミシー等の如き人物もありしが、此等は至つて少數にして、大多數は徒らに天を仰ひで長大息するに過ぎざりき。ウイリアム、シャーロック、ダニエル、ウォーター、監督バットラーの如きは學才に於ては欠乏せざりしかども、時勢の急務を知らず、又人々の靈を救はんが爲に活動する事を知らざりき。

僧侶の多數は乾燥枯淡なる道德上の意見を形式的に述ぶるに過ぎず。或者は美文麗句を弄して一時の喝采を迎へ、或者はデーズム、又はアリアン敎を唱へ、ボルテーヤをして、『アリアン敎徒は人々が宗派的の議論に飽き果てたる不幸なる時に復興せり』と云はしめたりき。或僧侶は時事問題に熱中し、講壇に政治論を上下し、ロバート、サウスの如きは、人をして『彼は講壇上の奇劇家にして、市井に來往する人々を畫きて講壇上に之を語る』と評せしめたりき。

正統派と唱ふる者の說敎さへ、福音を說く事は極めて稀にして、多くは冷にして無意義なる獨斷說を語るに過ぎず。從て何等の感化をも人々に與ふること能はざりき。於是敎會の衰頽は眞面目なる人士の心を憑き、敬虔なる大監督ライトンの如きは、『敎會には靈なく、徒に形骸を止むるのみ也』と歎じ、監督バルチットは、僧侶の無學に



して聖書を知らざる事、政黨に奔走して却て靈魂救濟の事業を怠る事等を述べて、『余は敎會の上に懸れる敗壞を見る每に、未だ曾て長大息せざることなし』と云へりき。

非國敎會は其主義と其實行とに於て共に比較的健全なりき。彼等の中には有名なる讃美歌の作家アイサック、ワッツ、有名なる辨解學者ナサニール、ラルドチル、有名なる著作家フイリップ、ドッドリッヂ等の如き敬虔なる人々ありき。然るに不幸にして彼等と國敎徒との爭論は、屢々政治的黨派心を帶び、紛々擾々爲めに傳道的精神を失ふに至れり。且當時デーズムとアリアン敎とは非國敎會の講壇よりも唱へられ、ガイス博士をして、『自然宗敎は當代の人心を支配せる一大思想にして、耶蘇の宗敎は唯之れあるが爲めに貴ばれ、耶蘇に特殊なるものは凡て排斥せらる』と歎せしめたりき。

第十八世紀の初頭は實に此の如き形勢なりき。於是第二宗教改革の必要は燃頭焦眉の急を告げたりき。然れ共此改革は神が新しき人を降し給ふに非ざれば起らず、而かも英國民の中には此氣運を促すべき者見えざりき。故にボルテーアは英國に漫遊して歸國後云て曰く、『英國に於ては人々改革を忌み、新宗教或は復興せる舊宗教が勢力を占むる能はざる程也』と。然れ共彼は誤てり、大に誤てり。彼が基督教の衰微を口にしたりし其時に、思ひきやオックスフォルドの敬虔なる二三の學生が、假令『新宗教』ならざるも、少くとも『復興せる舊宗教』の搖籃となるべき團体を組織しつゝあらんとは。ボルテーヤとウエスレー、同時代の幾多の人々に優りて、懷疑と唯物論との爲に腐敗せる國民に全く相反對したる性質の解決を與へたる二人の人は、此時同時に英國の地を蹈みたりし也。一人は才智を恣に用ふる事を眞の自由なりと誤解して、英國流の不信を佛國に輸入し、一人は罪惡の下に呻吟せる國民の狀態に深く動かされて、福音に由りて國民を復興せしめんと企てたり。鋭敏なる才智を備へたる若きパリ人と、舉動の深重なるオックスフォルドの學生とを見たりし者は、何人も正反對の方法に由りて世を動かす可き人物を見たりと思ひしなるべし。然り、彼等は正反對の方法に由りて世を動かしたりき。然れ共吾人は彼等の事業と結果とに由りて判するに、神に逆ひて戰ひたりし者よりも、神の爲めに戰ひたりし者の方に采配を上げざるを得ず。見よ日一日と經過する毎に、ボルテーヤの事業の有害なる性質は益々明となり、ウエスレーの爲せる事は、ボルテーヤの事業に勝りて世を祝し民を福する者なること明白となれり。吾人の今より語らんとするは此第十八世紀に生れ、神の爲めに戰ひ

て、其偉大なる效果を遠く萬世に遺せる人の生涯と事業と也。



## 第二章　幼年及青年時代

英國リンカンシーア郡の西北境にアクスホーム島と呼ばれたる一小地あり。面積凡そ百廿六方哩トレント、ドン、アイドル抔いへる川と、ドン、アイドルの二流を連絡せる溝渠とに依て圍まれたるを以て斯くは名けられぬ。此地方は河流の便あるを以て地味一体に豐饒にして且能く耕され、自ら天然の樂園を爲す。エプウオスと云へるは此地方の名邑にして、小山の上の小高き地に在り、人口二千を有せり。素より田舍の一小邑にして、市日に近隣の田舍人等が多勢集ひ來るの外、平常極めて靜閑也。古より聖賢、英傑の徒は多く邊陬の地に生るゝを常とす。メソヂスト教會の鼻祖ジョン、ウエスレーも亦此一小邑に於て初めて日を見たりし也。即ち彼は今を去ること二百年前、西暦一千七百三年、我元祿十四年、大石良雄等四十七人の浪士が吉良義英の邸を襲ひ、主君のために其讐を報じたる翌年、六月廿八日此處に呱々の聲を擧げぬ。

凡そ人物を造くるに三箇の要素あり、即ち遺傳、境遇、及び人物自ら也。此三者の中何れか最も勢力あるかは暫く之を論せず、兎に角此三者は人物を造くるに必要の要素也。ウエスレーの父祖は何れも敬虔なる牧師にして、第十七世紀に於て英國民が受けたる激しき爭の中に立ちて、高貴なる生活をなしたる人々なりき。去れば彼の脈絡の中に此高貴なる人々の血の交へられたりしは明なる事にして、思ふに彼は幼時より其父祖の物語を聞く毎に、自信自重の念を養ひ、高尚なる志氣を振起したりしなるべし。而して直接に大なる感化を

彼に與へたりしものは、疑もなく其父母の敬虔なる生活にして、エプウオスの牧師館は實にメソヂスト教會の搖藍とも云ふべきものなりき。

ウエスレーの父はサムエル、ウエスレーと云ひ、ウエスレーが生るる七年前エプウオス教區の牧師に任ぜられたりき。彼はオックスフオルドに於て英國教會の牧師たる準備をなしたりしが、當時政治上、宗教上の爭論劇しき中に立ちて、能く自己獨立の意見を有し、又非常の熱心を以て自説を主張したりき。彼は小冊子を著し、又新聞雜誌にも筆を執りたりき。彼は實に詩人、學者にして又同時に雄辯家たり、其筆と其舌とを以て當時のあらゆる論爭に加はりたりき。彼は深き學者といふには非ざりしかども、博覽にして且寛大なりき。而して又最も熱心に牧師たる義務を盡し、其職務に忠實なるや時として嚴酷に過ぎたるが爲め、他人の怨を買ふたるとも少からざりしといふ。彼の神學に缺點多かりしは言ふ迄もなし、當時の世は尙曙光の時代にして、彼れは此時代の子たるを免れざりき。然れ共彼は豫言者的眼識を以て、宗教改革の日ならずして來るべきことを豫知したりき。故に彼れ死に臨み、其手をチャーレス、ウエスレーの頭上に置き、『確然たれ、我國の基督教は必らず復興するの日來るべし、我は之を見ること能はざれ共、爾は之を見るべし』と云へりき。彼は又當時に於て既に外國傳道の必要を認めたりしといふ。

サムエル、ウエスレーの性情と德性とがジョン、ウエスレーに大なる感化を與へたりしは疑なしと雖も、更に大なる感化を彼に與へたりしは、スザンナ、ウエスレー也。彼女は第十八世紀に生れたる最も高貴なる婦人の一人にして、模範的婦人と云ふも過言に非ず。父

はアンチスレー博士と云ひ、嚴格なる清教徒にして、當時最も有名なる神學者の一人なりき。彼女は此の如き人の家庭に育てられたりしを以て、清教徒的熱心と、男子にも讓らざる豪氣の性質を有したりき。而て彼女は又學問にも熟達したりしかば、其小兒等の智識的進歩に向ても無頓着ならざりき。一言を以て云へば、彼女は妻として、母として殆と完全なる婦人なりき。彼女は其良人が種々の苦辛に出逢ふ毎に、滿腔の愛心を以て之に同情を表したりしが、又丈夫的剛毅の心を以て彼を勵まし、彼を助けたりしかば、其内助の功實に大なるものありき。而して彼女は十九人の小兒の母なりしが故に、其心配も亦少なからざりき。彼女は素より其温き心を以て其小兒等を愛したりしが、其の愛情は單に慈母的愛情には非ざりき。彼女は彼等を以て宛も種子を蒔きたる地面の如く思ひ、能く之を耕作し、培養するは自己の義務也と信じたりき。而して不幸にして苗にして秀でざるものありし場合には、自己は之を以て神の聖旨也として心に慰めたりき。斯の如くして彼女の品性は、平安なる時よりも悲哀の場合に一層其光明を輝したりき。

此敬虔にして才智に富めるウエスレー夫人は、常に深く自己の責任を感じ、其生き殘れる十二三人の小兒の道德及び身躰の發達に向て常に深き注意を拂ひ、自ら一家の政權を握り、紀綱を嚴にして、自己の規律的精神を萬事に鼓吹せんことを務めたりき。彼女は小兒を教育するに方りて、便宜の指導に任せ置くを好まず。故に自ら最良の教育法を案出し、規則を定めて自ら之を嚴守したりき。ジョン、ウエスレーの心は斯の如くして嚴格なる基督教的教育の模型に鑄られたるにて、彼が最も有力なる教育を受けたりしは實に此時に在りた

りし也。

ウエスレー夫人は素より凡ての小兒を均しく愛したりしが、ジョン、ウエスレーに對しては特別の興味を有し、特別の注意を向けたりしが如し。其故他なし、ウエスレーの尙幼かりし時、エプウォスの牧師館は失火に依て燒失したりしが、時にウエスレーは獨り樓上に取り殘され、殆ど燒死すべき處なりしに、幸に助けられて一命を全ふしたりき。ウエスレー夫人は此時より、此の如き恩惠の道を以て神が救ひ給ひし小兒を特別に愛育するは、神に對する義務也と信じ、身も靈も己れのものに非ずして神のもの也との事を幼き心の上に深く印せしめたりき。ウエスレー夫人の苦心は空しからず、ウエスレーは幼時より既に敬虔の念を有し、遊戯に餘念なかるべき齡に於て、非常なる宗敎心を發揮したりき。



ウエスレーが初めて兩親の膝下を離れて、チャーター、ハウスの學校に入學したりしは一千七百十四年の事にして、即ち彼が十一歳の時なりき。而して彼は十七歳にしてオックスフォルドの大學に入學したりしが、怜悧にして且勉强家なりしと云ふを以て、忽ち優等生の一人として數へらるゝに至りたりき、彼は古文學を好み、よく古大家を學びたりしが、唯能く之を領解したりしのみならず、又巧に古文を草したりき。而して彼は天性想像力に富み、從て詩才を有したりき。彼が多くの聖歌を作りしは即ち此詩才に依る也。

然れ共ウエスレーは唯智的才能を有したりしのみならず、又至て温厚にして、且嚴格なる性質を有したりき。彼は幼時より此性質を養ひ、殊に義務の念に富みたりき。此の如き性質をもつてオックスフォルドに來り、彼の驚愕に堪えざりしは、當時學校内の宗敎的生活

の甚しく腐敗したりし事なりき。將來教會の牧師となるべき人々が、不敬虔なる言論に耽りしのみならず、又公然不規律の生活を爲し居るを見て、彼は一驚を喫せざるを得ざりしが、此驚愕はやがて悲歎と變じ、又此腐敗と戰ふの必要を感じたりき。幸にして彼は幼時より敬虔なる家庭に育ち、惡に抵抗すべきことを教へられたりしを以て、此腐敗の中に立ちて誘惑に勝つことを得たりし也。

然れ共此時彼は未だ信仰の眞の基礎となるべきものを發見し得ざりき。『信仰に依て義とせらるべし』との事は、宗教改革の中心教理なりしが、此教理も久しく浮誇術學の中に埋沒せられて世に知られざりき。而してウエスレーの神學なるものも、畢竟當時の神學に過ぎざりし也。然れ共ウエスレーは基督の所謂『譎詐なき眞のイスラエル』にして、徒に祖先繼承の傳說を奉ずるを以て滿足せず、神の命を悉く守らんと勉めたりき。故に彼は聖書を學べば學ぶ程、自己と神との間に隔離する處あるを感じ、之が爲め深く心を勞したりき。而して如何にせば自己の靈魂と神との間に調和を得べきやとは、當時彼が解釋せんとして苦鬪したる問題たりき。

是れ實にウエスレーに取りては宗教的危機とも稱すべき時なりしが、彼の賢明なる母は能く此危機を看取したりき。此時彼女が彼れに贈りたる書中に吾人は左の如き言を發見す。云く、『御身は今宗教を以て御身が生活の義務となさんことを決心せらるべし。畢竟するに唯一の必要は此一事にして、其他の事は人生の目的に比較的關係淺ければ也。我は心より御身が今嚴密に御身自らを吟味せられん事を望む斯くせば御身は果して耶蘇基督に由りて救はるべしとの希望の正當なる理由を有するや否やを自ら知らるべし。御身にして果して此正

當なる理由を有せば、之を知るの滿足は御身の苦痛に報いて餘りあるべし。若し御身にして之を有せずんば御身は尙涙を流すの正當なる機會を發見せらるべし』と。

此宗教的危機に際して彼の母の愛と智惠とに滿てる助言と共に、ウエスレーに光明と指導とを與へたりしものは、彼が當時讀みたりし數冊の書物なりき。其第一はトマス、エ、ケンピスの『基督摸倣論』(イミゲーション、オフ、クライスト)にして、此書の厭世的臭味はウエスレーの初め甚だ喜ばざる處なりしが、後に至り彼は最も之を愛讀するに至れり。第二はジエレミー、テーラーの『神聖なる生と死の法則』(ルールス、ホーリー、ホリ、リビング、アンド、ダイイング)にして、ウエスレーの神秘的傾向は此書より得たる也。次はウイリアム、ローの『基督教徒の完全』(クリスチャン、パーフェクシヨン)と『重大の召』(シリアス、コール)と題する書にして、ウエスレーは此等の書に依て更に其神秘的傾向を强めたりき。以上の書物は疑もなくウエスレーに光明と指導とを與へ、彼は此等の書に深く負ふ處ありしと雖も、左りとて悉く此等の書を信じたりしには非ず。此等の著者の或説には甚しく反對したりしが、彼は此時に於て既に獨立の意見を有し、後來彼がメソヂスト派の特色として發揮したりし説は、此時既に彼の腦中に其萠芽を有したりしが如し。

一千七百廿五年ウエスレーは按手禮を受けて執事となり、翌年オツクスフオルド大學リンカン、カレッヂの特待生に撰ばれたりき。彼は此時より一層規則正しき生活をなし、自己の宗教的狀態を嚴察せん爲め日記を記さんと決心し、且每週一回聖餐を守り、施濟を爲し、此の如くして聖潔に達せんとしたりき。而して彼は此の如く唯中世の聖徒的生活を爲したりしのみに非ず、其才能、其學藝に於ても亦非凡なりしを以て一般に尊敬せられたりき。彼は語學に通じ、又哲

學上の議論に達し、論理に巧みにして何人も彼の如く即答、反辨に妙を得たるものなかりき。彼の材能は忽ち當局者の認むる所となり、希臘語の講師、諸級の議長に擧げられたりき。此時彼は齡僅に二十三歲にして、一千七百廿七年二月マスター、オフ、アーツの學位を受領したりき。

同年八月ウエスレーの父サムエル健康漸く衰へたりとの故を以て、ウエスレーのエプウオスに歸り、副牧師として父を助けんことを促したりしかば、ウエスレーは暫くオックスフォルドを去り、家に歸りて父を助けたりき。弟チャールスは五歲の年少にして、ウエスレーの家に在る間、オックスフォルドに在りて勉學しつゝありしが、彼は此時深く自己の靈魂の安否に疑て煩悶したりき。彼は其同僚の友と半文學的、半宗教的の會を組織したりしが、彼は此感情を其會友に語り、此會は遂に宗教的集會として發達し、間もなく精神的生活の燒點となりたりき。從て同僚の輕蔑と迫害とを蒙るに至り、會は『神聖倶樂部』と名けられ、會友は『メソヂスト』と命名せられたりき。而して是れ何れも嘲弄的に名づけられたる名目なりし也。

此時ウエスレーはエプウオスに退きて、父の事業を助け居たりしが、彼は深くケンビス、テーラー等の著書を喜び、父の委托せる信徒を見舞ふよりも、寧ろ退ひて默想に多くの時を費したりき。彼は全く世を避けて單獨の生活を送らんことを欲し、遂にヨークシーアの荒野に退きて少年の教育に一生を委せんと迄決心するに至りたりき。賢明なる彼の母は忽ち此危險を看取し、『此の如き生活は御身の性質に適せず、神は御身をして尙大なる事業を爲さしめんとし給ふ也』と云ひて、彼の此計畫を止めたりき。彼は此時又一人の眞面目なる

朋友の爲めに、此極端なる企圖を止められたりき。『君は神に事へて、天に往かんことを望むと雖も、人は神にのみ事ふることを得べきものに非ず。故に君は先づ夥伴を發見し、又之を造らざる可らず。聖書は決して獨居の宗教を敎へざる也』とは、此眞面目なる朋友がウエスレーを戒めたりし言なりき。

一千七百廿九年十一月ウエスレーはリンカン、カレッヂの學長に促されて、再びオックスフォルドに歸り來りたりき。弟チャーレスと其一團の朋友はウエスレーを仰ぎて、其小さき協會の長としたりしが、此時會員は僅に四人にして、ウエスレー兄弟の外には唯モルガン及びキルカムといへる二人のみなりき。然れ共此四人は非常に親密にして、唯宗教上の事に於てのみならず、學問上の事に於ても亦互に一致して相助けたりき。彼等は一週三四夕相會して希臘語の聖書と希臘及び拉丁の古文學を研究し、又日曜日の夜は神學書を讀みたりき。又此小さき團体には嚴しき規則ありて、會員は一週に二日斷食し、一回聖餐を守り、又常に自ら己を吟味したりき。彼等が此の如く近世的の傾向を有したりしは、假令其動機に於て嘉すべき點ありしとするも、甚だ危險なりき。幸にして彼等は一方に活動的精神を有し、著しく之を發達したりしを以て、第十八世紀の宗教的運動も難なく初まることを得たりし也。而して此活動的精神を其同僚に鼓吹したりしはモルガンにして、彼は一方に最も敬虔なる性質を有すると共に、他方に福音的傳道の精神を有し、貧民を恤み、其子弟を敎育し、病者を見舞ひ、苦める者を慰むる等の爲めに多くの時と勞力とを献げたりしを以て、此精神はウエスレーを首領とせる此一小團体を勵まし以て、遁世的傾向の發達を止めたりき。

斯くて此團体は漸次其會員を增加し來りしが、ジョージ、ホイットフィルドの入會は此團体に一の勢力を加へたりき。ホイットフィルドの入會したりしは一千七百三十五年の事にして、彼は此時オックスホルドの大學に在りて、同窓生徒の小使を勤め、學資を得て勉學し居たりしが、『基督摸倣論』を讀みて大に感ずる處あり、最も嚴格なる克己的の生活をなしたりしを以て、自然ウエスレー等の團体に同情を表し、遂に自らも之に加入するに至りし也。

勢力加はれば之を迫害するものゝ生ずるは自然の勢にして、ウエスレーの團体は今や嘲弄、攻擊、迫害の中心となりたり。大學の教授等も彼等の克己的生活の過度に失せるを咎め、遂には彼等の集會を禁ずるに至れり。於是一時は廿五人の會員を有したりし此團体も亦漸く萎靡して僅に五人の會員となりたりき。是れ實にウエスレーに取りては一大打擊なりしが、彼は之が爲め毫も失望せず、チャトレスと共に益々其初志を堅ふして道の爲めに働きたりき。而して彼は前途の必要を慮り、非常に節儉を行ひ、車馬の費を省かんが爲めに徒歩し、時としては數百哩を徒歩して敢て疲勞せりとせざりき。然れ共健全なる彼の身体も長く此の如き勞役に堪ゆると能はず、遂に彼は健康を損し、咯血するに至り、一夜血管破裂して終りまさに來れりと思ふが如き塲合に至りたりき。幸にして一名醫の盡力に依り健康を恢復し、間もなく再び其事業に着手するを得たりしが、彼は之が爲め常に短命を豫期したりき。

當時ウエスレーは未だ光明を發見すること能はざりき。故に彼は或時は希望をも有したりしが、又或時には畏懼の念に驅られて、靈魂の錨を何處に置くべきやを知らざりき。當時彼は義とせらるゝことゝ、

聖となることを混同し、律法の行に依て救はるゝものと思惟したりき。彼はオックスフォルドに在りて、默想と勉學とに十五年以上を費したりしが、未だ眞正の平和を得ざりしを以て、彼は此學校に於て得ざりし平和を傳道事業に依て得んとしたりき。彼が亞米利加傳道を承諾したりし一理由は、思ふに亦此の如き動機に驅られたりしが爲めなりしならん。



## 第三章　米國傳道、失敗及新生

一千七百三十五年卽ちウエスレー三十三歳の時、彼は其父を喪へり。エプウォス敎區の民はウエスレーに向て、父の職を襲ひ其牧師たらんことを懇請したりしが、彼は固辭して受けざりき。彼が之を固辭したるはオックスフルオドを去るを好まざりしが爲めにして、彼は學生の間に健全なる宗敎を復興する事を以て、天の特別に彼に與へたる使命也と確信したりき。而して彼はエプウォス敎區を牧するは、彼の力の到底及ばざる處也と思惟したりし也。後幾年ならずして、『世界は我敎區也』と云ひし人が、人口僅か二千に足らざる敎區を牧することを躊躇したりしは寧ろ奇といふべき事なれ共、彼が之を拒みたりしは決して勇氣の足らざるが爲めには非ざりき。故に彼は數週間後、之と全く異りたる方面より更に一の申込を受けたりし時、之を以て攝理の在る所也と信ずるや、直ちに之に應ずることを躊躇せざりき。

宛も此時より三年前の事なりしが、北亞米利加のサバンナ河岸に英國の殖民地開けたりき。此殖民地はゼオルジアと云ひ、長足の進歩を以て發達したりき。而して初めて此地に殖民を送りし殖民會社は、

之を基督教の基礎の上に發達せしめんことを望み、其一生を英國の移民及び土着の印度人教化の爲に委せんとする、熱心にして且敬虔なる青年の教師を求めつゝありき。オックスフォルドに在るメソヂスト青年の一團は最も此目的に適したるもの也とは、彼等の看取したりし所にして、此趣をウエスレーに申込みたりしが、寡居する老母を獨り殘して、遠き異國の旅に上らんことは彼の忍び難き處なるを以て、彼は一たび之を拒みたりしも其懇請せらるゝに及びて之を母に諮りたりき。『我にもし廿人の子あり、悉く此の如くして用ゐられんには、假令我は再び彼等を見ること能はずとも尙之を喜びとすべし』とは此時此貴き母が其子に答へたりし言なりき。今は何ぞ躊躇すべき、ウエスレー兄弟は、一千七百三十五年十月十四日其二人の友と共に倫敦を出立して米國に向へり。彼等と共に同船したる移民百廿四人、其中に廿六人のモラビアン人ありて、監督ダビド、ニッチマン之を率ゐたりき。ウエスレーの一行は乘船するや否其平生主張せる克己の主義を一層嚴重に實行せんと決心したりき。ウエスレー當時其日記に書して云く、『我儕は小事にも克己する事は神の祝福を受け、我儕の幸福となるべきことを信ずるが故に、肉食と飲酒とを全く廢止し、唯植物性の食物のみを取れり』と。數日後彼は又書して云く、『我儕の身体は從來取れる丈の食物を要せざることを發見したれば、我儕は夕食を廢することとなしたり』と。彼等は又嚴しき規則に從て其起居を律したりき。即ち朝は四時に起きて一時間密室の祈禱をなし、五時より七時迄は共に集りて聖書を研究し、八時には疎末なる朝餐を喫し、船客と共に禮拜を守り、九時より十二時迄は、ウエスレーは獨逸語を研究し、チャーレスは說教を認め、デラ

モットは希臘語を學び、インガムは小兒に教訓を授けたり。而して午後には船客と共に語り、又は彼等の爲めに敬虔の德を養ふに足る書物を讀み、四時に至れば、再び祈禱を捧げ、夜分は又讀書、會話を爲し、此の如くして一日を送り、樂しき床に入るを常としたりき。今日にては僅か一週間內外にして大西洋を橫斷することを得べしと雖も、當時は三ヶ月以上を要し、且其航海なる者も今日の如く安全にして容易なるものには非ず、暴風雨は屢々起つて船の覆らんとしたることも一再には非ざりき。而して其度毎に船中は大騷動をなし、ウエスレーも此の如き時に際しては恐怖を免れざりき。然るにモラビヤンの一行は如何なる危急の場合に際しても、少しも驚くことなく、神色自若たりき。ウエスレーは乘船の初めより此一行の敬虔にして、忍耐强く、又親切なる有樣を見て、深く心を動したりしが、彼等の危險に際して更に恐るゝことなき有樣を見ては驚かざるを得ず。或日宛も此モラビヤンの一行が禮拜を初めたりし時なりしが、俄かに暴風雨起り來りて、波は甲板を洗ひ、風は檣を折り、船は將さに覆らんとしたりしか共、彼等は自若として更に動かず、讚美歌を歌ふて平然たりき。ウエスレーは後其一行の一人に向ひ、『君は彼の時恐れ給はざりしや』と尋ねたりしに、彼は答へて『我は神に謝す、我等は恐れざりき』と云へりき。ウエスレーは更に、『然れども婦人小兒等は恐れざりしや』と問ひたりしに、彼は又答へて、『否とよ我等の中の婦人も、小兒も死することを恐れざる也』と云へりき。ウエスレーは之を聞て、是れ實に彼の達せんして未だ達せざる所なるを深く感じたりき。

斯くてウエスレーの乘船は一千七百三十六年二月六日朝八時米國大

陸に到着したりき。昔時クリストフア、コロンバスは初めて新世界に上陸したりし時跪て天に謝したりしとの事なるが、ウエスレーも亦跪て天に謝したりき。第十五世紀の大發見家が自ら其發見の如何に大なるかを知らざりしが如く、此第十八世紀の大宣教師も、自己の働が將來此大陸に於て如何に發達するかは更に豫想せざりしなるべし。

ウエスレーは到着後モラビヤンの牧師と交りを結び、其の働の方法に就て其の助言を求めたりき。モラビヤンの牧師はウエスレーに向て、『我は先づ君に向て二三の事を問はざる可からず、君は自から心の中に證を有し居らるゝや、神の靈は君の靈と共に君の神の子たることを證し居らるゝや』と問へり。ウエスレーは平生人に教ふる事を爲したりしが、未だ曾て此の如き問を受けたる事あらず。故に茫然自失して之に答ふるを知らざりき。モラビヤンの牧師は、ウエスレーの當惑せる有樣を見て更に問ふて、『君はイエス、キリストを知らるゝや』と云へり。ウエスレーは『我は彼れの世の救主なるを知れり』と答へたり。『然り、然れ共君は彼が君を救ひ給ひしを知らるるや』とはモラビヤンの牧師が更にウエスレーに問ふたりし言にして、『我は彼が爲めに死し給ひしを望む』とはウエスレーの答なりき。モラビヤンの牧師は更に問ふて『君は自らを知れりや』と云へり。ウエスレーは『我知れり』と答へたりしが、更に語を添へて『我は此等の言の空しからんことを恐る』と云へりき。モラビヤンの牧師は是に於て自己の悔改せる有樣と經驗とを此青年なる宣教師に語り聞かせたりしが、彼は深く之に感動し、自己の宗教には尚欠けたるものあるを益々深く感ずるに至りたりき。

ウエスレーはモラビヤン教徒と其交際を深くするに從て、益々彼等の生活の高潔にして、快活なる有樣を歎美せざるを得ざりき。彼は一日彼等の集會に列し其監督を撰ぶ有樣を見て、英國教會に比し、其儀式の單純にして而かも嚴肅なるを見て深く感動したりき。『其集會全体の單純にして莊嚴なる、余をして殆ど十七世紀間の空隙を忘れしめ、天幕製造人保羅若くは、漁夫彼得が議長として開きたる、一定の儀式なく、而かも靈と力とに滿てる當時の集會を想像せしめたり』とは此時彼の叫びたる語なりき。

ウエスレーは印度人傳道に其全力を注がんとしたりしが、當時移民は殊に牧師の注意を要し、ウエスレー兄弟と其朋友とは先づ此方に其全力を向けざるを得ざりき。於是彼等は移民傳道に力を盡したりしが、ウエスレーが殊に熱心に力を盡したりしは貧者、病人及び青



年にして、當時既に米國に於て數多かりし奴隷にも、彼は亦深き興味を以て傳道したりき。彼が長じたりし語學の才は世界の各所より移住せる殖民に傳道するに多くの便宜を與へたりき。即ち彼は近頃學びたりし獨逸語を以て、獨逸語のみを知れる貧民の一部落に傳道し、又サバンナに住せる佛蘭西の移民には佛語を以て傳道し、以太利亞の殖民には以太利亞語を以て傳道したりき。而して彼は更に西班牙の殖民に傳道せんため、新に西班牙語を學びたりしと云ふ。

ウエスレーの才能と品性とは、漸次民衆の注意を引き、彼に來りて其の說敎を聞かんとするもの漸次增加し來り、從て彼の名聲と勢力とは漸く高まり來りしが、彼の極端なる敎會主義は其敎區の人々を怒らしめ、幾ならずして彼の名望も地に落つるに至りたりき。當時彼は初代敎會の習慣を復興するに熱心にして、例之バプテスマの如

きも浸禮を主張し、監督の按手を受けざる教師のバプテスマを拒み、彼の意見に從てバプテスマを受けたるものに非ざれば聖晩餐に與るを禁ずるが如きことをなしたりき。而して又彼の極端なる禁慾主義も亦民衆を驚かするの一端となり、初め熱心に彼に來りたる民衆は漸くにして冷淡となり、而して遂に公然彼に反對するに至りたりき。彼がサバンナの長官の一少女を聖餐より斥くるに至りて民衆の反對は極端に達し、彼は遂に殖民地に於て傳道することの不可能を悟るに至り、一千七百三十七年十二月英國に歸ることゝなり、此の如く熱心を以て初めたる彼の米國傳道も失敗を以て終りたりき。然れ共此失敗は彼の品性發達の上に必要にして、彼は之に依て自己の宗教の基礎の甚だ弱きものあるを悟りたりき。然り彼が他日の成功は實に此失敗より胚胎したりし也。

ウエスレーが英國に歸航せる船中にて費やしたる數週間は、彼に取て實に大切なる時なりき。彼は前と同じく、船客の爲めに傳道することを怠らざりしが、彼は自己の有樣を顧みて深き憂に沈みたりき。故に彼が當時の日記は其不安の有樣を示せる言語を以て充さる。彼は實に左の如く云へりき。

我は印度人を敎化する爲めに亞米利加に往きたり。然れ共嗚呼誰れか我を敎化するものぞ。此不信の惡しき心より我を救はんものは誰ぞや。我宗教は夏の宗教也、我は能く談ず、然り、我は危險身に在らざる時能く信ず。而かも一たび死の思想念頭に浮ぶ時、我心は凝ふ、我は死するは益也といふこと能はざる也。嗚呼此死の畏懼より我を救はんものは誰ぞや。我は何を爲すべきや。我は何處にか遁れんや。

數日後の日記に彼は又左の如く記せり。

余がゼオルジアの印度人に基督教の性質を敎へんとて、故國を去りしより、既に二年と四ケ月を經たり。然れ共余は此間自ら何事をか學びたりしか。嗚呼是れ他人を改宗せしめんとて亞米利加に往きて、我は未だ自ら改宗せざりしとの事是れなりき。余が地の極端に於て學びたりしものは、實に是れなりき。即ち余は神の榮を受くるに足らざるもの、余の全心全生は悉く腐れて惡むべきもの、余は神の生命より離れし怒りの子供、地獄の世嗣たるもの也との事也。

彼は此の如く失望と苦痛とを以て、亞米利加より歸り來れり。而して彼は其腸九回せん許りに煩悶したりき。然れ共神は此の如く熱心に己を求むる靈魂を長く暗黑の中に置き給ふものに非ず、今やウエスレーは一道の光明を得、基督に在て新なる人となるの端緒を開きたりしが、彼をして爰に至らしめたりしものは又モラビヤン教徒なりき。彼は歸來モラビヤンの徒と交りを結びたりしが、宛もよし此時獨逸よりペテル、ベーレルと稱する敬虔にして且聖書の智識に富める一人の教師來りたり。ウエスレーが初てベーレルに面會したりしは一千七百三十八年二月七日にして、此日はウエスレーの云へる如く、『實に記念すべき日』なりき。彼は此日より屢々ベーレルに逢ふて、其膝下に座し、其教訓を受たりしが、彼が幾多の至難なる問題を擧げて、ベーレルの解釋を請ひたりし時ベーレルは之に答へて、『我兄弟、我兄弟、君の其哲學は棄てざる可らず』と云へりき。彼は此親切なる朋友の忠告に從ひ其哲學を棄てたりき。而して彼は問もなく彼が從來抱きたりし眞の信仰の性質に關する彼の考は全く誤り

たりし事を發見したりき。彼は是迄信仰とは唯智識的に天啓を信ずる事也とのみ思ひ居たりしが、彼の朋友は彼に向て、生ける信仰の在る處には必らず幸福と清潔なる生活の伴ふべきものにして、信仰とは畢竟基督に由りて其罪赦され、神と和ぐことを得たりとの確信を神に置くに外ならずとのことを敎へたりき。ウエスレーは初め是等の事を聞いて耳新しく感じ、心に多くの疑惑を抱きたりしが、ベーレルの勸めに從て自ら聖書を研究したりき。聖書を研究するに從て、彼の疑惑は漸次解け去り、『聖靈自ら我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す』、『信ずる者は自ら證を有す』、『神に依りて生れたる者は罪を犯す能はず』等の聖句を讀むに至て、ベーレル亦彼を欺かざるとを悟りたりき。然れ共彼は未だ此の如き信仰が如何にして瞬間に得らるゝやを解すること能はざりしが、聖書の研究とモラビヤンとの交際とは、遂に彼をして此間の消息を悟ることを得せしめたりき。

此時までウエスレーの信仰は、僕たるものゝ信仰にして、彼は未だ子たるものゝ信仰を有するに至らざりき。故に彼は此事を思ふて煩悶に堪えず、自ら說敎することを廢せんとしたりしが、ベーレルはウエスレーの此企に同意せず、『君は之を得る迄信仰を宣べ傳へよ、去らば君は之を得て之を宣べ傳ふるを得ん』と云ひて彼を慰めたりき。於是彼は唯に講壇よりのみならず、或は途上、或は旅店、凡そ機會の在る場合に於て傳道することを勸めたりき。彼は又漸次一定の形式に從て祈る習慣を改め、唯に密室に於て祈るのみならず、公衆と共に祈ることを勸め、又聖徒の交際の利益あることを悟り、モラビヤン敎徒の立てたる集會に列席して互に勸め互に勵ますことを努め

たりき。

ウエスレーは熱心を以て、其心の全く罪より救はれん事を求めたりき。此時彼が或る朋友に贈りし書簡の中に左の如き言あり。

然れ共余は『信せよ、去らば救はるべし、信ずる者は死より生命に移れり』との聲を聞けり。(是れ豈神の聲ならざらんや)ォヽ救主よ、爾の外何物にも頼ること勿らしめよ。我儕をして爾に從はしめよ。我儕をして心空しからしめ、而して我儕の心に平和と喜悅とを充たしめ給へ。今も後も限りなく爾の愛より我儕を離らしめ給ふ勿れ。

而して彼は尚語を續で左の如く云へりき。

余は左の事をなす事に依りて此賜を終りまで求めんと決心せり。

即ち (一) 全体にても一部分にても自己の功作又は義に頼ること

を全く棄つる事、(二) 他の受恩法に加へて、義とせらるべき信仰、即ち基督の血は我が爲めに流されたることを十分に信じ、基督を以て我が基督、我が唯一の義、聖、又贖となすの信仰を得る爲め斷へず祈る事是也。

救の日は終に來れり。宛も暗黑の後に東天曙光を告ぐる如く、今やウエスレーは其長く煩悶せる狀態より醒めたり。彼は實に此時の光景を叙して左の如く云へりき。

余は此の如く之を求めて、水曜日即ち五月廿四日に至れり。(余の之を求むるや無頓着と懶慢と冷淡と、而して屢々罪惡とを以てしたりと雖も) 余は同日の朝五時頃聖書を開きて此等の言を發見せり。云く、『又神其榮と德に因りて至大なる貴き約束を我儕に與へ給へり、此は爾曹をして此約束に因りて世に在る處の慾の敗壞を

脱かれ、神の性質をもたしめんため也』(彼後一ノ四)。余は尚聖書を讀みて他の處を開きしに、『爾は神の國より遠からず』との言に逢着せり。午後に至り、余は請はれて聖保羅(セントポウロ)教會に至りしに、其時奏せし音樂は、『嗚呼エホバよ我れ深き淵より爾を呼べり、主よ願くは我が聲を聞き、爾の耳を我が懇求の聲に傾け給へ、ヤハよ主よ爾若し諸の不義に目をとめ給はゞ誰れか能く立つことを得んや、去れど爾に赦あれば人に恐れかしこまれ給ふべし、イスラエルよエホバに依りて望を抱け、そはエホバにあはれみあり、又ゆたかなる贖あり、エホバはイスラエルを其諸の邪曲よりあがなひ給はん』との事なりき。其夜余は心甚だすゝまざりしがアルダースゲート街の小集會に往けり、余は此處に於て或人のルーテルの著はしたる羅馬書序言を讀むを聞けり。時宛も九時十五分前なりしが、神が基督を信ずるものゝ心になし給ふ變化を叙するを聞き、余は余が心の不思議に燃ゆるが如きものあるを覺えたり。余は自ら救はれん爲めに基督を信じたりし事と、基督は余が罪を取り去り、余を罪と死との法律より救ひ給ひしとの確信を余に與へ給ひしことを感じたり。余は是に於て曾て余を嘲り又余を迫害せし人人の爲めに力を盡して祈れり。而して余は立ちて余の心に感せし所の事を證したり。

ウエスレーは此の如くして遂に平和に達したりき。吾人の既に見たりし如く、彼は初め外形の義を求めんとしたりき。而して彼れは間もなく宗教は外部の行爲に在るものに非ずして、心に在るものなるを發見したりき。故に彼は心の聖からんことを熱心に求めたりき。而して彼は神の律法の吾人に求むる處の無限なることと、之を滿足

するの道は唯吾人が全く聖くして基督の心と一致するに在りとのことを認めたりき。故に彼は之を達せんと勤めたりしが、彼は之に依て救はれたりとの確信も、又眞正の幸福をも得ること能はざりき。彼は實に未だ之が基礎を得ざりし也。而して彼は遂に此基礎は內に在らずして外に在りとの事を學びたりき。即ち救は基督に於ける神の恩寵に在りとの事と、此恩寵を得るは唯信仰に由るとの事を學びたりき。即ちウエスレーはルテルと同じ實驗に由て、信仰に由り義とせらるゝとの同じ結論に達したりし也。此時彼齡正に三十五歲。此時チャーレス、ウエスレーも亦其兄と同じ經驗に由りて、同じ結論に達し、兄よりも三日前既に罪の赦の確信を得たりき。而してホイットフイルドも亦既に同じ結果に達したりき。此三人が打揃ふて此の如き經驗を得たりしは思ふに深き天の攝理に由るならん。

ウエスレーは自らモラビヤンに深く負ふ所あるを認めたりき。彼は曾てゼオルジアに在りし時より、一たび此モラビヤンの故國を訪ふて、親しく彼等の實況を調査せんと欲したりしが、今や機熟して、彼は其數人の朋友と共に、先づエセルスタインを訪ひ、マリーボルンに於てチッツエンドルフ伯に會し、去てヘルンフッスに赴き、此處にてモラビヤン敎徒の實情を調査し、大に得る處ありて英國に歸り來りたりき。メソヂスト敎會がモラビヤン敎徒に負ふ所あるは、以上述べたる處に依りて明白なるが、ウエスレーは唯に彼等に依りて眞の信仰に導かれたりしのみならず、其宗敎上の思想及び敎會政治の如きに至ても亦彼等に負ふ所少なからざりし也。

# 第四章　メソヂスト運動の開始

ウエスレーは千七百三十八年九月中旬神の爲に全力を盡さんとの念に燃え、獨逸より歸り來りしが、彼は未だ神が彼を如何なる途に導かんとし給ふかを知らず、彼には未だ確固たる計畫なかりき。彼は天意を深く信じて、糧の準備の外には明日の事に意を勞せずして、彼が取る可き方針を天より示す時の來るを待ち望む習慣なりき。されど彼は間も無く非常なる熱心を以て、彼の眼前に横はれる狹小なる範圍に於て活動を始めたりき。其頃倫敦にはホヽチック等が組織したる小宗教團體多くありしが、當時の精神的頽廢の爲に多く解散し、モラビアン派の人々が復興したる僅かの團體の殘れるに過ぎざりき。ウエスレーは靈性上の進歩を大に渴望したりしが故に、此等



の團體に意を注ぎ、其温かなる奬勵に由りて兄弟等の信仰を强むる事に力を盡くしたりき。

然れ共彼の熱心は長く小範圍に制限せられざりき。彼の心は宛も一種の魔力に魅せられたるが如く、人々の棄てゝ顧みざるが如き卑賤にして無識なる群民の方に惹かるゝを禁じ得ざりき。此等の人民は曾て教會の闘を跨ぎたる事あらず、而して此等のものに近くには、ウエスレーも亦教會を去らざる可らざりしを以て、彼は一時思案にくれたりしが、國教派が彼の講壇に立つを禁じたりしを以て、彼は茲に斷然意を決し、彼が獨逸より歸るや、其曾て按手禮を受け説教する權利を有せしを利して、倫敦及び地方に於て幾多の人々に説教し、因襲的の弊風を打破し、乾燥なる道德説等を捨て、信仰に由りて義とせらるゝと云へる福音主義の教義を大膽に説きて、己れ先づ

救はれたる人にあらずんば能はざる如き力を以て、聽衆の心を動かしたりき。是れ當時に於ては新奇なりしが故に、非難の聲は囂々として起り、彼は異端視せられ、若し彼にして此新奇なる說を唱へて止まずんば、敎會は彼を放逐すべしと威嚇し、時ならぬ恐ろしき雷は今にも落ちんばかりの勢を以て、彼の頭上に鳴りはためきたりき。かゝる事は珍らしき事に非ず、是れ古來世の弊風に抗して、濁流を双手に支へんとしたる志士等が等しく遭遇したりし運命にして、ウエスレーは少も之を意に介せざりき。彼は英國々敎會の利害に深く意を留め、非國敎徒なる名を聞く事すら忌む程に、國敎の判益を思ひ居たりしが、唯其敎義に服するとは絕對的に拒みたりき。彼嘗て云く、『余輩が說く敎理は英國敎會の敎理に外ならず、實に國敎會の根本的敎理を說けるなり、余は國敎に屬する者と何れの點に於ても異なることなし、唯國敎に從はざる僧侶とは異なれり』と。

嘗てウエスレーが立ちて說敎したりし講壇は彼に對し一つ〳〵鎖されたりき。或日彼は同じ場所にて二回說敎する計劃にて、午前の集會にて述べたりし題目を午後の集會にて完結すべしと報告し置きたりしに、其敎會の牧師は彼が最初の說敎に驚きて、午後の集會を廢止せしめたる事ありき。

彼はかくして敎會に入る事を拒絕せられたりしかども、之が爲め少しも其活動を減ずる事なく、彼が當時の日誌は、人々の靈を救はんとの熱望を以て充滿し、而して此熱望は彼が全生涯中主として懷抱したりし者なりき。彼は又怠らずニューゲートの囚人を訪ふて、福音を說き、屢々豐かなる成功を得たりき。千七百三十八年十一月、彼は將に刑に處せられんとする罪人と共に斷頭臺上に立ちたりしが、

此罪人はウエスレーに導かれて、神を信じ、臨終の際に立會はん事をウエスレーに求めたりし者なりき。死する數分前『君の心地は如何なるや』と問はれたりし時、罪人は之に答へて、『余は到底得可しと信ずる能はざりし程の平安を得たり、此平安は神より來れる者にして人智を以て量り知る可からざる者なり』と云へりき。ウエスレーの弟チャールス、ウエスレーも兄に伴はれて此場に臨み、群集に向ひて、奬勵の辭を述べたりしが、其の夕ウエスレーは其の日誌に『余が父祖の主なる神よ、余をも受け入れ給へ、爾の子供の中より我を捨て給ふ事勿れ』と記したりき。

彼は斯る卑近なる福音的の働きに千八百三十八年を過ごしたりき。此頃オックスフォルドの學生團體の重なる會員は共に倫敦に在りしが、兄なるジョン、ウエスレーを最も熱心に助けたりしチャールス、ウエスレーも、兄と同じく倫敦の講壇に立つを拒まるゝの榮を得、米國に於て大いに名聲を博したりしホイットフイルドも亦此頃英國に來りて、ウエスレー兄弟と同樣なる待遇を受けんとしたりき。

千七百三十九年一月一日ウエスレー兄弟、ホイットフイルド、インガム、ホール、キンチン等は凡そ六十人の人々と共に、フエッターレーンに於て愛餐式を行ひ、互に熱心に祈りて新しき年を迎へ、大運動を開始せんとしたりき。此集會はホイットフイルドの云へりし如く『實にペンテコステの期來れるが如く』なりき。彼等は五日後再び會して、時勢の急に應ずるには如何なる事が最も適切なる可きかを協議し、祈禱と斷食とに其日を過ごし、ホイットフイルドの云へりし如く、『神は彼等の中に將に大いなる事をなさんとし給へりと云へる充分なる確信』を以て會を散じたりき。

運動を試むるに當りて未だ相當なる場所を得ざりしが、ホイットフイルドは此戰場を野外に發見し、劈頭第一に戰鬪を開始するの榮を負ひたりき。彼の敎を聽かんとて數千の人は集り來りしかども、彼れ其友と同樣の厄難に遭ひ、三日間に五個所の講壇は彼の爲めに閉ざされたりき。かく反對の勢の增し來りしにも拘はらず、二十五歲の血氣の青年なる彼は毫も屈せず、野外に立つて說敎せんと決心し、直ちに此計畫を實行するの好機を得たりき。ブリストルより少しく隔たれるキングスウッドと云へる所に多くの石炭鑛夫住居したりしが、彼等は憐れにも開明の空氣に觸れず、敎會も牧師もなく、何人も彼等の靈魂の爲に憂ふる者なかりき。ホイットフイルドの聞てブリストルを訪ひたりし時、彼は多くの人の『若し異敎徒等を改宗せしめんとせば、何故にキングスウッドの炭鑛夫の中に投せざるや』と彼に告ぐるを聞きたることありき。而して今や彼はブリストルに於ても僧侶等が彼の運動を妨害するを見て、キングスウッドに行かんと決心したりき。此報一夜キングスウッドに達するや、殆んど二百人の鑛夫等は集りて彼の至るを待ちたりき。彼は來れり、而して丘陵の中腹に立ちて彼等に福音を說きたりき。此日は千七百三十九年二月十七日にして、成功と勝利とを得たるメソヂストの運動の開始せられたる記憶す可き日なりき。ホイットフイルドは最初の集會に於て成功し、大いに力を得てキングスウッドに於て野外の說敎を續けたりしが、二回目には二千人、三回目には四千乃至五千人の聽衆を得、幾何もなくして聽衆の數は一萬二萬の多きに增加し來りたりき。大勢の群集が此大說敎家の敎に恍惚として、我を忘れて耳を欹て居る樣を見る程人の心を動かす者はなし。荒くれたる鑛夫等の眼

に漲れる隨喜の涙は、黑ずみたる頰に跡を印して、花に置く朝露の如く、天の惠が彼等の上に降りし事の章となり、多くの鑛夫の改宗は豐かに此年少なる傳道者の勞に酬ひたりき。

其後幾ならずしてホイットフイルドはブリストルの公園に於て說敎し、大成功を得たりしが、米國へ渡航する前英國の他の部分をも訪はんとを希望したりき。米國に於ては彼を要する緊急なる業ありしが、彼は新に得たる改宗者を飼ふ者なき羊の如く捨て置きて去るに忍びず、其友ウエスレーに書を送りて彼の事業を繼續せん事を求めたりき。ウエスレーは暫し躊躇したりしが、遂に友の求を諾し、倫敦を去りて、ブリストルに着したりしかども、ホイットフイルドの如く野外にて說敎するの可否は之を決するに苦みたりき。彼れ曰く『余は敎會內に於てするにあらざれば人の靈を救ふ事すら罪と思ふ程に、凡ての點に於て秩序と事の適否とを大に考へたりしが故に、野外にて說敎するが如き新奇なる事は初め之をなすを欲せざりき』と。

然れ共彼は長く狐疑逡巡せざりき。天が召し給ふ聲は彼の偏見のそれよりも高く聞へ、四月二日彼はブリストル附近の地にて三千人に說敎し、第十八世紀に於ける英國宗敎上の大運動は其緒に就き、後來の赫々たる大成功は仄かに其萌を表はしたりき。蒼々たる天を屋根とし、颯爽たる微風綠葉を動かし、自然の琴の音を搔き立つる所を好個の說敎所とし、堂塔白堊輪奐の美を極め、尖塔雲を摩するが如き、人の手に成れる敎會に代へたるウエスレーの說敎は、自然と調和せざる人工的の虛飾をすて、眞情を肺肝より吐露して、人々の肺腑に徹するに至りたりき。彼はホイットフイルドがブリストルに初めたる業を繼承して、大なる勇氣を以て之に當り、既に覺醒せる

人々を集めて、極めて單純なる團結を作りたりき。是れ彼が自ら作りたりし團結の最初の者として目すべき者なりき。彼は千七百三十九年四月四日其日誌に書して曰く『三人の婦人は各週相會し、倫敦の會合と同樣なる目的を以て、互に其過失を告白し、相互に祈り合ふて、癒されん事を求めんと決し、また四五の青年も同樣の目的の爲に會合する事に定めたり、誰か（其實質に於いて）此事が神より與へられたる惠の手段なるを否認する者ぞ』と。此等の僅かなる人々の會合は忽ちにして其數を增加し、ウエスレーは彼等の便宜の爲に、禮拜所を設げざるを得ざるに至りたりき。かくて彼は千七百三十九年五月十二日『讃美と感謝との聲の裡に』質素なる會堂の礎を定めたりき。是れ此世に建てられたるメソヂスト教會堂の最初のものなりき。彼はブリストルに在る友人の送れる僅かなる寄附金を得て、大胆に此建築の責を負ひたりき。彼曰く『余は實に金錢を有せず、又之を得るの見込なかりき、されど此世は主のものなり、足れり、我等は主の名に由りて着手し、毫も疑ふ所なかりき』と。

ウエスレーはキングスウッドの鑛夫の間に活潑なる運動をなし、ホイットフイルドが去る前に礎を定めたる學校の建築を監督し、完成の後一名の教師と女教師とを雇ひ、福音的事業の基礎を强固にしたりき。是に於て人々は喜んで嘗て耳にせざりし樂しき福音を聞き、キングスウッドは幾何ならずして、其面目を一新し、飲酒放逸の風は影を潛め、爭鬪怨恨は變じて和合と平和となり、卑猥なる歌舞の音は清き讃歌の聲となり、褻瀆の言は變じて敬虔なる祈禱の語となりたりき。

ウエスレー及びホイットフイルドの說教に依りて悔改したる鑛夫等

は、聖晩餐に與からんとして、ブリストルの教會に至りしに、其牧師等は彼等が其會員に非ずとの口實を以て之を斥けたりき。故に彼等は前よりも一層の親密を以て、ウエスレー等の周圍に集り來りたりき。ウエスレーはブリストルのみならず、其近所の町村に傳道地を開き、此時既に毎日三回宛の説教をなしたりき。而して彼の説教は驚くべき効果を奏し、彼の説教する所には晴雨に拘はらず、多數の人々集り來りて、熱心に聽聞したりき。彼がブリストルに於ける最初數ヶ月間の働は實に大なる同情を其土地の人民より得たりし也。ウエスレーは一時人の感情を激せしむるが如き説教を爲さざりしが、彼の説教に依て悔改したる者は初めより少なからざりき。而して當時最も著しかりし事は、此悔改の瞬間的にして、使徒時代に起りしが如き出來事の甚だ多かりし事なりき。而して此内的實驗には屢々不可思議なる身体的動作伴ひたりき。例之身体の至て健全なりし者、ウエスレーの説教を聞て、深く其罪を悔ひ、煩悶して地上に倒れ、全く氣絶して數時間又は數日に及ぶが如き事ありき。而して此の如き場合には、常にウエスレーの祈禱に依りて喜悦と平安とを以て蘇生し、全く生れ變りしが如き者となりたりき。斯の如き例は一再にして止まらず、或醫師の如きは初め之を疑ひて信せざりしが、自ら之を目擊するに及んで、大に驚き其中に神の指あるを認めたりと絶叫したることありき。又ウエスレーの長兄サムエル、ウエスレーの如きも、此瞬間的更生を信せず、之れを嘲けりたりき。故にウエスレーが此時長兄に贈りし書面の中に左の如き言あり、云く、『此問題は主として事實問題也、兄上は此の如き事なしと云はるゝも、我は實際之を目擊せるが故に、之を確信する也』と。ウエスレーは初代

使徒と同じく一方に福音を說くと共に、他方に神の嚴なる律法を說き、以て人々の良心に訴へたりしが故に、其罪に苦められて、一時氣絕するが如き事ありしは驚くに足らず。然れ共ウエスレーは之を以て必ず悔改に伴ふものと認めざりしのみならず、更に之を奬勵するが如きことをせざりき。彼の說敎には人の想像心を燃すが如き事更にあることなく、彼は常に靜肅に、眞面目に、唯眞理を說くことを勤めたりき。

ウエスレーがブリストルを中心として傳道せると同時に、弟チャーレスはホイットフイルドと共に倫敦に於て傳道を開始したりき。ホイットフイルドは米國に渡航する計劃なりしが、多くの群集其周圍に集り來り、彼をして去らしめざるより遂に止まりて倫敦に於て傳道することゝなりしが、倫敦に於ても野外に於て說敎し、ムーアフイルドの曠原は彼の働き場所にして、時には二三萬の聽衆ありき。此年六月ウエスレーは倫敦に來りて說敎したりしが、ホイットフイルドは此時其喜を其日誌に記して、『余はウエスレーが余の例に倣ひ倫敦に於ても亦野外說敎をなして、惡魔の所領に新襲擊を加ふるを得しを喜びつゝ臥床に入れり』と云へりき。

此新運動は英國敎會の僧侶に一大恐慌を與へたりき。於是彼等は小冊子を發行して、頻りにメソヂストを攻擊し、又講壇よりはメソヂストの一團は工作なき信仰を敎ふるものにして、道德の根柢を危くする者也と云ひて劇しく攻擊したりき。而して監督等も亦メソヂスト運動の進步に驚きたりき。彼等は初め熱狂せる少年何をか爲し得んと輕侮したりしが、僅々一年にして彼等の運動が長足の進步を爲したるを見て驚かざるを得ざりし也。於是カンターベリーの大監督

はチャーレス、ウエスレーを召喚して、嚴しく彼等の所爲を叱責し、且若し此の如き運動を中止するに非ずんは、ウエスレー兄弟は敎會條例に從て處分せられ、或は敎會より破門せらるゝに至るやも計られずと云ひて威嚇したりき。チャーレスは一時此威嚇に懼れたりしが、幸に熱心なるホイットフィルド側に在りて之を勵ましたりしを以て、彼は次の日曜日にムーアフィールドに於て其初めての野外說敎を試み、一萬人に說敎したりき。是れ大監督の威嚇に對する挑戰にして、彼は『大監督の聲に從ふよりも、良心の聲に從ふは爲すべき事也』と大膽に宣言したりき。

ブリストル敎區の監督も亦ウエスレーを喚問したりき。初めに神學上の問答あり、後監督はウエスレー及び其同志のものを攻擊し、遂に『君は此敎區內に說敎する爲め派遣せられたるに非ず、故に速に此處を去らるべし』との命令を下したりき。ウエスレーは之に答へて、『閣下、余の地上に於ける務は余の爲し得べき善を爲さん事也。故に余は余の最も多くの善を爲し得べしと信ずる處に、余の適當也と思惟する間留まらざる可らず。今余は此處に於て最も多くの善をなし得べしと考ふるを以て余は此處に留まる也。福音を傳ふるの任命は余の天より受けたる處なれば、余は此處に在りて說敎する也。余もし世に在る間福音を傳へずば禍なる哉。閣下は知らるゝならん、余は敎師として按手禮を受けたり、故に余は一般敎會の敎師也。而して余は大學の特待生として按手を領したれば、余の任は一敎會に限らるべきに非ず。余は英國敎會の何處に於ても說敎するの任を有する也。故に余は此處に在りて說敎するが爲め、人の定めたる法律に背きたりと思惟せず、若し余が斯く思惟する時來らば、其時こそ

余は「我れ人に從ふべきか、神に從ふべきか」と問ふべき也』と云ひたりき。

ウエスレーは實に彼の云へりし如く、一般教會の教師なりき。彼れはブリストルより漸次其働を其周圍に擴張したりしが、更に進んでウエールス、デボンシーア、倫敦、オックスフォルドにまで其運動を擴張したりき。斯くして彼は後年自ら嚮導者となりて英國全体に大運動を開始すべき基礎を据へ、旅行傳道の計劃も亦此の如くして造られたりし也。此千七百三十九年は、ウエスレーが此の如くしてメソヂスト派の基礎を置きたりし年にして、最も記憶すべき年也。

## 第五章　内部の分裂、外部の進歩

メソヂスト運動の開始せらるゝや否、第十八世紀の宗教改革は、内部の分裂に由て、まさに一頓挫を來さんとしたりき。幸に此分裂はウエスレーの運動に大打擊を加ふるに至らざりしかども、兎に角其門出に方りて内部的軋轢を生じたりし事なれば、多少の影響を受けたりしは疑なし。

ウエスレーの悔改がモラビヤンの人々に負ふ所ありしとの事は、既に述べたるが如くなるが、爾來彼は殆ど二年間彼等と共に共同して働きたりき。然るに千七百三十九年の終に至り、ウエスレーは獨逸より新に渡來せる教師等が、無道徳主義（アンチノミアニズム）と靜寂主義（クワイエチズム）とを傳へつゝあるを發見したりき。此無道徳主義と云へるは信仰さへあれば道徳は守らずとも可也と主張するものにして、靜寂主義と云へるは、祈禱も聖書の研究も道徳的の行爲も凡て無益也、唯靜寂を守れば信仰は自らにして得らるべしといふ一種の神秘教也。前者は初め獨逸のへ

ルンハッスに起り、今やモラビヤンの教師に依りて英國に輸入せられたりき。後者は佛國に起り、今や又マダム、ギョンの著書の飜譯に由りて英國に紹介せられたりき。ウエスレーは此等の非聖書的なる教理に反對し、初めはモラビヤンの人々をして其誤謬を悟らしめんと百方苦心したりしが、遂に彼は其効なきを悟り、彼等と全く分離せんと決心し、千七百四十年七月廿日を以て斷然分離を宣言したりき。當時夫のベーレルは歸國中なりしが、此報を聞て大に驚き、急ぎ英國に歸り再調和を謀りたりしが遂に不成功に終りたりき。

此の内部の分裂は大なる心配をウエスレーに與へたりしが、彼は之に由て傳道的精神を減損せざりしのみならず、一層の勇氣を以て活動したりき。此の如くして彼の開始せる運動は漸次進歩し、彼は獨力を以て外部の要求に應ずる能はざりしを悟り、其社中より最も敬虔にして、且適當なる信徒を撰び之を補助者となして働かしめたりき。當時尚ウエスレーは僧侶的階級の僻見を有し、平信徒の説教を奬勵せざりしが、遂に事情止むなくして、平信徒を採用するに至りたりしは稍後に屬する事なりき。

當時メソヂストの傳道は既に手廣く擴張せられたりき。即ちホイットフイルドは亞米利加に在りて盛に成功ある傳道をなし、チャーレス、ウエスレーは兄を助けて傳道し、インガムはヨークシーア及びウエールスに、ジョン、ベンヂットはデルビーシーアに、デビッド、テーラーはライセスターシーアに働きたりき。此等の人々は其教育、其説に於て各々相異りしかども、共に心を合せて同一の事業に從事したりき。

ウエスレーも亦千七百四十年と四十一年の兩年を全く旅行傳道に献

げたりき。彼は倫敦及びブリストルを其二中心として、此處よりバッス、ウインドソル、スザンプトン、ライセスター、ノッチングハム及びウエールスに傳道したりき。而して彼は續て野外に於て說教し、多くの聽衆を引きたりき。彼の町村に入るや工人は其工場を棄て、坑夫は其鑛山を棄て、爭て彼の周圍に集りたりき。然れ共彼は凡ての場合に此の如く歡迎せられたりしには非ず。初めに彼を歡迎したりしものも、次には石の雨を以て彼に酬ゆるが如きとは敢て珍しき事に非ざりき。千七百四十年の初めブリストルに於て傳道したりし時、一夜俄に一揆起りて彼を攻擊し、其勢當る可らず、遂に市長は其吏員を督して亂民を捕へ、其の首魁を禁錮して僅に之を平げたる事ありき。又倫敦に於ても彼は一日亂民に圍まれたるとありしが、彼は此時靜に『公義と撙節と來らんとする審判』とを語り、彼等を祝して去らしめたりき。後二日亂民は再び來りて會堂を圍み、彼に向て凶暴を逞ふしたりしが、彼は又靜に之を散ぜしめたりき。彼の亂民を處するや、少しも騷ぐことなく、先づ彼等をして凶暴を恣にせしめ、而して後靜に公義を說きたりき。故に彼等の光景忽ち變化し、初め獅子奮乃の勢を以て來れるものも、終に羊の如くして去りたりき。

此事に關しウエスレーは其日記に左の如く云へりき、云く、『余は惡魔が其王國を滅ぼしつゝあることを知るの智惠なきに驚く。余は信ず、彼が神の眞理に公然敵する時、彼は未だ嘗て其僕の一人若くは多くを失はずんばあらざる也。此等の僕は神を求めざるに、神に求めらるゝ也』と。彼は又云く、『余の家に歸りし時、余は無數の亂民が戶外に群集し、余を見し時均しく聲を放ちて叫べるを見たり。余は余

の友等に歸宅せんことを促し、自ら群集の中に進みて、慈悲仁愛に富み、惡を惡み給ふ主の名を宣べ傳へたり。彼等は暫く互に顏を見合せて立てり。余は彼等に彼等は此大なる神の面より遁れ得べからざる事を語り、且共に神の惠みを祈らん事を彼等に求めたり。彼等はしかなしたり、余は是に於て彼等の爲めに神の祝福を祈り、彼等は戸内なる小さき群に害を與へずして去れり』と。

ウエスレーは此の如く無學の亂民に依て其働を妨げられたりしのみならず、又屢々難問を發し彼を陷穽に陷れんとする人々の妨害にも出逢ひたりき。嘗て彼がブリストルに在りて說敎せる時、群集の中より一人聲を放ちて、『爾は僞善者也、惡魔也、敎會の敵也、爾の說く所は虛妄の敎也、敎會の敎に非ず、惡魔の敎也』と叫びたることありき。此人は羅馬敎の僧徒の假裝せるものなりしと云ふ。又ノッチングハムの市場にて說敎したる時にも、或人彼の後に來り、暴言を放て彼の說敎を妨げんとしたりしが、ウエスレーの顧みて彼の顏を見し時、彼は柱の蔭にかくれ遂に其姿をかくしたるとありき。

然れ共此等のものよりも更に恐ろしき敵は當時の宗敎家なりき。彼等はウエスレーを背敎者、謀反人と罵り、英國敎會の面目を汚し、其荷ふ法服を辱かしむるもの也と云ひて非難したりしが、彼等は唯言語に於て彼を攻擊したりしのみならず、今や彼等は公然彼に向て戰を挑みたりき。

ウエスレーは唯に巡回傳道者なりしのみならず、又牧師なりき。彼は常に東西に奔走して旅行したりしが、又新しき信者を訪ふては其信仰をかため、病者を訪ふては其心を慰め、又屢々獄舍を訪ひて囚徒に向ひ悔改を促し、彼に依りて悔改めたるものも少からざりき。

ウエスレーはモラビヤンと分離して以來、其社中を『合同結社』(ユーナイテッドソサエチー)と稱し、之を堅固に發達せしむる爲め必要なる制度を採用するに努めたりき。ブリストル、及び倫敦に於ては組會(バンド、ミーチング)及び愛餐盛に採用せられたりき。又此社中より品行の正しからざるものは除名し、務めて平和と結合を保つことに盡力したりき。當時會員は益々增加し、千七百四十一年九月即ちモラビヤン派と分離して凡そ十二ヶ月後には、倫敦のみにて其數一千に達したりき。而して是等の會員は多くは貧民なりき。ウエスレーは千七百四十年の嚴冬を慮り、彼等を飢寒より救はんためブリストルの人々に訴へて寄附金を募り、又倫敦には十二人の執事を置き、貧民救濟の事を掌らしめたりき。當時此社中には既に會堂あり、學校あり、是等を維持し又教師を支ふるために多くの費用を要したりき。從て凡て此等の事を處理するため制度、





條例なるもの、必要をも生じ來りしを以て、ウエスレーは若々として塲合と事情とに應じ、漸次此等の必要を充さんとしたりしに、端なくもまた內部の紛爭を生じたりき。內部の紛爭とは即ちウエスレーとホイツトフイルドとの間に生じたる教義的爭論なりき。

ホイツトフイルドはカルビンの神學を奉じ、深く豫定說を信じたりしが、ウエスレーは之を信せず、是れ寧ろ神を不義、不公平となすものにして、聖書の教訓に反する說也と思惟したりき。彼等は此の如く其神學說に相違ありしに拘はらず、初めの間は平和の爲めに、此點に就ては共に緘默を守り居たりしが、兩者の弟子等は其師に倣ふこと能はず、ホイツトフイルドの米國に向ふや、彼の弟子等は倫敦及びブリストルに在る人々の中に此爭論を起さしめたりき。ウエスレーは元來寬弘の長者にして、此等の教義に關しては會員其信ず

る處に從はんことを希望したりしが、不幸にして此教義は爭論の中心となり、社中の平和を敗らんとする傾向あるを見て、無益なる爭論を止むべしとの事を命じたりしが、彼等はウエスレーの忠告に從はず、益々平和を亂して顧みざりき。於是ウエスレーは止むを得ず此等の人々を社中より放逐したりき。而して彼はブリストルに於て『自由の恩惠』と題する最も有力なる説教をなし、豫定の説に反對したりしが、此説教は直ちに出版せられ、廣く世に流布せられ、其一部は米國に在るホイットフイルドの手に渡りたりき。於是ウエスレーとホイットフイルドとの間には數回の交渉あり、ホイットフイルドはウエスレーの説教に對する答辨を出版し、兩者の調和は全く敗るゝに至りたりき。ホイットフイルドは其の弟子等の勸めに從ひ、千七百四十一年三月十一日英國に歸着し、遂にウエスレー兄弟と相對峙して二個の福音を宣べ傳へたりき。此分裂はメソヂストの運動に於て最も悲しむべき出來事なりしが、説の相異なる者を強て調和するは素より難し。故に兩者相分れて働きしことは、メソヂズムに取りて寧ろ力の源となり、此運動は至る所に勝利を得たりき。且此兩者の分るゝや聊かも私意ありしに非ず、故に彼等はやがて再び調和し、共に歩武を一にして宗教改革の事業に從ひたりき。

ウエスレーは此の如くして既に三年以上の傳道を爲したりしが、彼の働は常に大成功を以て伴はれたりき。然るに此意外の成功は彼をして一種の不安を感ぜしめたりき。其不安とは、此の如く燃え立てる人心の要求を、如何にして二三人の働者に依りて滿足せしめ得べきやとの事是れなりき。夫の野外説教は驚くべき迅速を以て福音を傳播し、ウエスレー及び彼の同勞者の巡回傳道は、各方面に彼等の

運動を擴張したりき。此に於て彼等の働に依りて悔改めたる人々を結合し、教訓し、保護するの必要生じ來りたりき。ウエスレーは初め此等の人々を英國教會に依托せんとしたりしが、英國教會は一般にウエスレーの運動に反情を示し、其門戸を鎖して、彼に依て悔改めたるものを近くることを拒みたりき。故に若し此等のものを其儘に放擲し置かば、彼等は牧者なき羊の如く、再び狼の爲めに殺さるゝより外なし。抑も如何にして少數の人々を以て一方に多くの悔改者を起し、他方に之を保護教育し得べきや。是れウエスレーの深く苦慮したる處なりき。

此困難を救ふの道唯一あり、即ち新に悔改めたる人々の中より適當なる人物を撰び、之を傳道者の中に加へて働かしむる是也。此事たるや、初め到底實行し難く見えたりしが、之を外にして此困難を救



ふの道又他に之れあらず。故にウエスレーは心ならずも漸次此方法を採用するに至りたりき。初め彼をして之を斷行せしめたりしは、偶然の出來事なりしが、是れ實は偶然の出來事に非ずして、神の不可思議なる攝理なりし也。

ウエスレーは倫敦、ブリストル及びキングスウッドに在る協會を智慮ある數人の平信徒に委托し、彼の不在中一般信徒の爲めに聖書を讀みて之れを教導せんことを依頼したりき。彼は平信徒にして說教するは、教師の特權を侵害するもの也との說を保持したりしが故に、彼等の說教するを許さざりき。然るに彼等の中の一人なるトマス、マッキスフイルドなる者其熱心に驅られ、倫敦の集會に於て說教したりしが、其說教は非常なる成功を以て伴はれたりき。時にウエスレーはブリストルに在りしが、之を聞て以爲らく、是れ秩序を乱る

者也と、之を止めんとして急ぎ倫敦に歸り來りたりき。此時ウエスレーの母は倫敦に在りしが、彼が不安と心配の色を以て歸り來れるを見て、容易ならぬ事のありしを推し、其所以を問ひたりしに、ウエスレー突如として答へて云く、『トマス、マキスフイルドは說敎家となれり』と。母は於是靜に彼に告げて云く、『ジョンよ、汝は能く我が感情の如何なりしやを知る。此の如き事を我が容易く贊成するものに非ざるは汝の知る所ならん。然れ共汝此青年に關して爲す所を愼め。彼は汝と同じく說敎せんとて神に撰ばれたるものなれば也。汝宜しく彼の說敎の效果を調査し、又自ら彼に聞くべし』と。彼は母の言の理あるに服し、自らマキスフイルドの說敎を聞きたりしが、彼は其の中に神の攝理あるを看取し、云く、『是れ主也、彼をして善しと見給ふ所を爲さしめ給へ』と。ウエスレーの謬見は此の如くして破れ、平信徒說敎の制は此の如くして立てられたりき。今日メソヂスト敎會の地方傳道師（ローカル、プリーチアー）なるものは即ち此の如くして起りしものにして、平信徒が敎師と同じく說敎するの特權を得たるはウエスレーの賜也といふべし。扨此の如くして一たび平信徒の說敎することの公許せらるゝや、メソヂストの各協會は各其中より適當なる人物を撰みて、會員の敎導と傳道の事業とを任じたりき。此等の人々は何れも質朴、敬虔なる信徒にして、其職業を爲す傍ら福音を宣傳したりき。當時ウエスレーは既に其部下に此の如き働者廿人を有したりき。

千七百四十二年ウエスレーは倫敦に在るメソヂストの協會を分ちて數箇の小團体となしたりしが、是即ちメソヂスト敎會特色の一なる小會の嚆矢なりき。ウエスレー其日記に書して云く、『余は熱心にし

て且智慮に富める人々を會し、余の監督せる人々を知ることの困難なることを彼等に告げたり。談論の末彼等皆以爲らく、各人を最もよく知るの法、之を小會に區別し、ブリストルに於ける如く、余の最も親任せる人々を撰で之を監督せしむるより善きはなしと。是れ倫敦に於ける小會の起源也。余は此事に就て殆ど神を讃美するの辞を知らず。此制度の有用なる事は爾後益々明白となれり』と。

ウエスレーの補助者として神の最初に起し給へる説教者は、ヨークシーアの石工にして、ジョン、チルソンと云へる人なりき。彼は倫敦に於てウエスレーの説教を聞て悔改め、後家に歸り、其身に起りし大變化を鄕黨隣里に告げ、又福音を彼等に宣傳したりしが、彼の簡明にして熱心なる説教と、其敬虔なる生活とは鄕人に大なる感動を與へ、多くの人々を基督に導きたりき。彼はウエスレーに書を贈て其助言を求めたりしが、ウエスレーは自ら其地に巡視するの必要を認め、千七百四十二年五月同處に赴きたりき。是れ彼が英蘭北部に於る最初の傳道旅行にして、彼は馬背にて倫敦を發し、六日にしてビルスタルに到着したりき。此地は即ちチルソンの働に依りて多くの動搖を起したる處にして、途中彼は面白き出來事に遭遇したりき。請ふ彼の日誌に依て彼をして自ら語らしめよ。彼云く、『余は途中一人の眞面目なる人に追及し、往々共に語れり。彼は直ちに彼の抱ける説を余に告げたり。故に余は之に反せるが如き事は何事をも言はざりき。然れ共彼は之を以て滿足せず。余は果して彼と共に豫定の説を信ぜるや否やを知らんと求めたり。余は反復彼に告ぐるに、我等は寧ろ實際上の事に就て語るを可とす、然らずんば我等或は相互に憤怒するが如きとあるべしとの事を以てしたり。我等は此の如

くして凡そ二哩を往きたりしに、彼は何時の間にか余を導きて論爭の中に入れたり。而して彼は益々やつきとなり、汝は心腐れたり、思ふに汝も亦ジョン、ウエスレーの徒なるべしと云へり、余は答へて、否とよ、余自らジョン、ウエスレー也と云へり、此に於て彼は宛も知らずして蛇を踏みたる人の如く、直ちに逃げ去らんとしたりき。然れ共余は彼よりも騎馬に巧なりしかば、彼と同乘し、勸めて其心を彼に示さんとしたり。斯くして我等はノルザンプトン街に來れり』と。

ウエスレーは遂にブリスタルに着したりき、爰には夫のヂルソンと彼の働きに依りて造り成せるメソヂストの小協會ありき。ウエスレーは之を見て大に喜び、從來多少危みたりし平信徒の說敎に關する疑團も全く氷解したりき。彼は此小協會の狀況を詳に査察し、又野外に於て說敎し、萬事をヂルソンに委托して、更に北方に向て進み、五月廿八日ニューカッスルに到着したりき。此地は此地方に在る石炭坑場の中心にして、一小都會也。當時風俗の腐敗實に甚しく、ウエスレーは一夜市中を散步し、飲酒、放蕩の甚だ盛なるを見、福音宣傳の必要を悟り、次の日曜日の朝早くジョン、テーラーと共に市端に立ちて讚美歌を歌ひ初めたりしに、三四人のものが、何事の初まりしやを見んとて來りしを初めとし、忽ち增して四百人となり、五百人となり、ウエスレーが說敎を終りし時には千四五百人にも達したりき。ウエスレーは『彼は我等の德の爲めに傷けられ、我等の不義の爲めに碎かれ、自ら懲罰を受けて我等に平安を與ふ、其撲れし傷に依りて我等は愈されたり』と說敎したりしに、彼等は何れも深き感にうたれたりき。於是彼は自己のジョン、ウエスレーなるこ

と、其夜再び其處にて說敎すべしとの事を告げたりしに、時刻に及びて凡ての勞働者は一群となりて集り來り、宛も波濤の押し寄せ來りし如く、小山の傍に行列をなし、忽ち大なるピラミッドを造りたりしが、何れも眞面目に、靜肅にウエスレーの說敎に耳を傾けたりき。ウエスレーは再び神の限りなき恩寵に就て語りたりしが、彼が說敎を終りし時、聽衆の多くは彼を見、彼と語らんとて前後左右より彼を圍み、彼は殆んど其宿所に歸ること能はざりし程なりき。後幾ならずしてチャーレスは此處に來りて、ジョンの開始したる働を繼續し、ジョンも亦此年の終に再び來りて六週間此地方に於て傳道したりしが、ウエスレーを歡迎したる事未だ此地方の如く甚しきものあらず、幾ならずして多くの悔改者を生じたりき。ウエスレーは自ら此地方に於ける働の狀況を記して左の如く云へりき。云く、

『余は何れの地方に於ても、此の如く神の働の均一にして且漸次に爲されたるものあるを見たるとなし。此地の働は斷へず、歩一歩と發達せり。ブリストル又は倫敦に於けるが如く、一時に多くの事の爲されたることなしと雖も、何事か斷えず爲されつゝあり。一個人に於ても亦此の如し。他の地方に於て通例ありしが如き、信仰の勝利は余の此地に於て見ざる所也と雖も、信徒は皆靜穩にして堅固に進歩せり。神をして其よしとする處を爲さしめよ』と。

ウエスレーは此地を去るに臨み、地面を購ひ、孤兒院を附屬せる一小會堂の建築に着手したりしが、之が爲めには七百ポンドを要したりしを以て、多くの人々は其成功を疑ひ、ウエスレーが死する前には其完成を見ること能はざるべしと云ひたりき。然れ共ウエスレーは神の爲になす事は、神必ず之を爲さしめ給ふべしとの確信を有し

たりき、而して實に彼の信仰の如くなりたりき。

ウエスレーは北部地方よりの歸途、途上往く〳〵傳道して、遂に其故郷エブウォスに歸り來りたりき。是れ彼が曾て生れ、曾て成長したりし處にして、青山依然として青く、川河長へに流れて止まずと雖も、古老は既に半死して、當年の青年亦既に半白也。思ふに彼は舊時を追懷して無限の感慨に沈みたりしなるべし。彼の父の相續者は久しく彼を攻擊しつゝありしが、今や彼至るに及んで堅く其講壇を鎖して彼の之を用ゆるを許さず。故に彼は止むことを得ず、墓地に至り、父の墓石の側に立ちて、群り來れる人々に說敎したりき。此時彼の感想果して如何、思ふに百感迫り來りて、涙襟を濕すを覺えざりしならん。彼は一週の間日々墓地に於て說敎したりしが、深き感動を聽衆に與へ、悔改むる者も甚だ少からざりき。曾て三十年間敎會に出席せざりしもの、ウエスレーの事を聞き、好奇の念に驅られて、彼を見んとて出で來りしが、彼は此人の身動きもせず立ち居るを見て、突然來りて、『君は罪人なるか』と問ひたりしに、彼はいと沈みたる憂の聲を以て、『全く罪人也』と答へ、尙ウエスレーを凝視して止まざりき。彼の妻と僕とは彼を捕て家に携へ歸りしが、此人は此時より全く悔改めて變化したる人となりたりきと云ふ。是より先エブウォスの人々はウエスレーの徒を訴へて之を罪に陷れんとしたる事ありき。判官は莊重なる態度を以て、彼等が如何なる罪惡を犯したりしやを問ひたりしに、彼等は其訴へたる理由を發見することを能はずして、暫く默然たりしが、其中の一人答て云く、『彼等は他の人よりも自ら善良也と云ひ、且朝より夜に至るまで祈れり』と。判官更に問ふて云く、『彼等は其外何事をもなさゞりしや』。一老

人答て云く、『然り、彼等は余が妻を改心せしめたり、彼女は彼等の中に出入せざりし時には、冗舌の婦人なりしが、今や彼女は羊の如く靜なるものとなれり』と。是に於て判官は彼等に答へて、『彼等を還せ、而して彼等をして此村中の惡漢を悉く改心せしむべし』と云ひたりき。此一話はウエスレーの歸鄕せざりし前既にエプウォスにメソヂストありしことを証するものにして、彼來りて後、彼等は一層の勢を得て其數を增し、彼が出發せる時には、自給の一協會を組織するに至りたりき。

此頃ウエスレーの母は重き病に臥して命旦夕に迫りたりき。ウエスレーは千七百四十二年七月十八日倫敦に往きて弟妹等と共に母の枕頭に侍しぬ。七月廿三日の朝彼女眠より醒め呼んで云く、『我愛し奉る救主よ、汝は我終焉に臨み、我を助けんとて來り給ふや』と。敬虔なる彼女の眼底には救主の榮光髣髴として映じたりけらし。午後三時に至り銀繩正さに解けて金甌今や碎けんとする時、子女を顧みて謂て云く、『兒等よ我放免せられなば、直に歌を以て神を讚美せよ』と。云ひ終りて敬虔なる靈は溢焉として天に移り、アイザック、テーロルが『ウエスレーの母は宗教及び道德の意義に於てメソヂズムの母也。夫人の剛毅と其從順なること、其思想の高調なること、其獨立の精神、其自制、其敬虔なる溫き感情、其子女に與へたる實行的示導等は悉く其子等の品性と言行とに由りて明に表顯せられたり』と云ひたりき第十八世紀の偉婦人は遂に其働を息めて永遠の安息に入りき。

# 第六章　衝突及迫害

千七百四十三年中ウエスレーは間斷なく其傳道旅行を繼續したりしが、此時より彼の働きの範圍は益々擴張し來りたりき。而して彼は當時殊に北部地方の傳道に最も多くの力を盡したるも、彼は傳道するや一ヶ所に留まること數日に過ぎず、問々數時間にして去ることありき。此の如く彼は靈魂を救はんとの一念に驅られ、險惡なる天氣も、飢渴疲勞も更に厭はず、寸陰も尙之を安りにせずして、斷へず巡回傳道したりき。

千七百四十三年の初めウエスレーは再び其故鄕に歸りたりしが、曾て彼に其講壇を貸すことを拒みたりし、エブウォスの牧師は、彼が主の晩餐に與ることをも拒みたりき。於是彼は此地を去り、ニューカッスルに至りしが、此地に於てはウエスレーが曾て傳道したりし以來悔改むるもの續出し、其小さき協會も益々强大となり、其働の結果頗る良好なりき。ウエスレーは暫く爰に留りて近傍の町村に傳道しつゝありしが、此時彼は其働を外部に擴張するよりも、既に傳道せる地に其力を集注し、一定の方法に從て巡回傳道することの必要を悟りたりき。是に於て彼は方區の制なるものを定めたりき。方區の制とは、一箇の場所を中心として、其周圍に數箇の傳道分營を設け、一人若しくは數人の說敎者を撰みて之を監督し、斷へず區內を巡回せしむる方法にして、此制度は極て單純なるものなれ共、大なる効果をメソヂスト敎會に與へたりき。此くしてニューカッスルは先づ當時最も重要なる方區の一となりたりき。

ウエスレーが此時新に傳道したりし地方の一は、バラセーと云へる

ニューカッスルの北凡そ十哩に位する一村落なりしが、此村落は全村悉く坑夫にして、當時其風俗極めて野蠻にして、日曜日には男女老幼相集り舞踏、嬉戯、喧嘩、爭鬪等あらゆる惡事をなして恥ぢざりき。ウエスレーは深く之を憫み、一日風雪を犯して彼等の中に入り、福音を宣べ傳へ、猶再三彼等に說敎したりしが、其効果著しく顯はれ彼等の多くは悔改するに至りたりき。而して彼が七月に至り四度彼等を訪ひたりし時、彼は既に此處に一小協會を組織するを得たりき。後數年彼は此協會に就て語りて云く、『此處に在る坑夫等の協會は、英國に於ける凡ての協會の模範たるを得べし。彼等は何人も其集會に欠席することなし。彼等の間には何等の不和なく、心を一にし、思を同ふし、互に相愛し、相勸めて善をなせり』と。

ウエスレーはニューカッスルより歸り、ビルスタルに往き、チルソンと共に初めてリーヅを訪ひたりき。此地には既に一小協會の組織せられたるものありしが、後英國北部地方メソヂスト敎派の中心となりしは實に此地なりき。然れ共此地に於てはニューカッスルに於るが如く、ウエスレーを歡迎せざりしのみならず、彼が會堂に於て說敎しつゝありし時、醉酒家の一群亂入して其說敎を妨害したりしが幸にして彼の熱心なる祈禱は、彼等の膽を冷かならしめ、彼等をして靜に退かしめたりき。

倫敦に於ける反對は更に甚しかりき。一日ウエスレーがグレートガーデンスに在りて說敎したりしに、一群の暴徒は、善良なる聽衆を妨害せんとして、牛群を其中に驅り、又石の雨を降らしめたりき。ウエスレー當時の事を記して云く、『其石の一余が眉間を撲ちたりしが、余は微痛をも覺えざりき。余は流るゝ血を拭ふて後、彼等の中

に入り、聲を振り上げて神は信ずる者に、畏懼の靈に非ず、力と愛と堅固なる心の靈を與へ給ひしことを証したりき。余は全會衆に顯はれたりし靈に由りて、神が余が聊にても神の名の爲めに苦むことを得たりし恩寵を與へ給ひしを明に見たりき』と。

ウエスレーはチエルシーに於ても　ウインドソルに於ても亦亂民の迫害を蒙りたりしが、倫敦附近に於ける此迫害は永續せざりき。是れ判官の爲めに制止せられたりしが爲めにして『保護を要する場合には何時にても適當の保護を與ふべし』とは、此時ミットルセックスの判官長のウエスレーに約束せる言なりき。宛もよし、或集會に於て亂民の一群押し寄せ來り、石を投じて會衆を傷けたりしかば、ウエスレーは彼等に向て、速に去るに非ずんば捕へて判官に引き渡すべしとの警告を與へたりしが、彼等其言に從はざりしを以て、ウエスレーは其巨魁を捕へて判官の手に渡したりしが、此一事は痛く彼等の心を寒からしめ、倫敦市中に於ては再び迫害なかりき。

然れ共以上の迫害は、之を中央及び南部の諸州に於てメソヂスト教徒が受けたりし迫害に比すれば寧ろ些々たるものに過ぎず。チャーレス、ウエスレーは是よりも更に甚しき迫害を受けたりき。即ちウアルサウルに於ては屢々石を投せられ、之が爲めに地に仆れたることありき。シエッフイールドに於ては一人の武官に導びかれたる亂民の一隊説教場に闖入したりしが、チャーレスは大膽にも其場を守て去らざりしが爲め幾多の傷を負ひたりき。而して此武官はチャーレスの剛膽を怒り、帶劍を拔て其胸に擬したりしが、彼を刺すこと能はざりき。而して又シエッフイールドの亂民は頑固なる國教會の僧侶に煽動せられ、遂にメソヂストの會堂を破壞したりき。コンウ

オールに於ても、セント、アイブスに於ても、チャーレスは同樣なる迫害に遭遇し、ブールに於ては全く其敎區より放逐せられたりき。後幾もなくウエスレーはチルソンと共にコーンウォールに至り、凡そ二ヶ月を此附近の傳道に費したりしが、此間彼は非常の困難に遭遇し、衣食住に欠乏したりしことも少からざりき、彼は屢々褥なき板の上に、古き上衣を枕として眠りたりしが、或夜半彼は寢返りせんとして、チルソンの目醒め居るを見、『チルソン兄、安心し給へ、余の一方の脇腹は尙安全也、皮のすりむけたるは唯一方のみ也』と云ひしことありき、又彼が食物なきが爲めに苦みたることも一再のみには非ざりき。嘗て彼は馬より下り、路傍の籬に實れる黑莓を摘みて食し、チルソンに向て、『チルソン兄よ、我等は此處に多くの黑莓あるを感謝せざる可らず、此國は空腹となるには最良の國なれ共、食物を得るには最惡の國也。此地の人々は我等は說敎することに由りて生活し得べしと思惟せるにてもあらんか』と云へりき。然れ共此等の困難はチャーレスが嘗て受けたりし迫害、又スタッフォルドシーアに於て彼が今より受けんとする困難に比すれば言ふに足らざるものなりき。

ウエスレーの初めウエチッスベリーに於て說敎したりし時は、坑夫等喜んで彼を歡迎し、忽にして三四百の人々集り來りしが、此成功は痛く僧侶の怒を勵まし、地方の官吏亦亂民を煽動したりしかば、メソヂスト敎徒は其住家を破壞せられ、器具を掠奪せられ、剩へ彼等の言に從て其信仰を棄てざる者は、或は鞭たれ、或は死を以て脅かされたりき。ウエスレーは之を聞て、不幸なる彼の弟子等を慰め且勵まさんがため、直ちにウエチッスベリーに赴きたりき。彼は到

着の當日正午市街の中央に立ちて說敎したりしが何人も之を妨ぐるものなかりき。然るに午後に至り、其宿所に在りて靜に何事をか書しつゝありし時、亂民來りて彼の家を圍みたりき。彼は共に宿りし人々に祈らんことを勸めたりしに、彼等は一時退散せんとする如く見えたりしが、忽ち更に多くの人々と共に將さに彼を襲擊せんとしたりき。彼等一齊に呼んで云く、『說敎者を出せ、我等彼を得んとす』と。彼は彼等の一人に其首領を携へて家に入らしめんことを請ひたりしに、一人の首領は入り來りて彼と數言の談話を交へたりしが、獅子の如くたけり狂ひし彼は忽ち羊の如く變じたりき。ウエスレーは更に二人の最も凶暴なるものを携へ來らんことを請ひ、彼等は來りたりしが、數分時にして彼等も亦忽ち靜穩なる人々と化したりき。此に於てウエスレーは彼等に出で去らんことを請ひ、自ら群集の中に出で、其中に立ちて、『諸君は余に何を求め給ふや』と問ひたりき。彼等の中或者答へて『我等は汝が我等と共に裁判所に往かんことを欲す』と云へりき。ウエスレーは『余は諸君の仰に從ふべし、心より』と答へ、尙數言を述べたりしに、彼等は『此人は正直なる人也、我等は假令血を流すも此人を保護すべし』と叫びたりしが、或人々は尙彼に對して厚意を表せざりしを以て、彼は二三百人の亂民と雨を冒して二哩隔りたる地に住める法官の許へ往きたりしが、此法官は此事件に干涉することを拒みたりき。

斯る時しも、ウエスレー保護せられつゝ携へ去られたりとの報ウアルサウルに達するや、ウアルサウル市中の惡人等は直ちにウエスレーを搜索せんとして出で來り、遂に彼をダルラストン亂民の手より奪ひ取り、其市街に曳き來りたりき。ウエスレーは途中一大家屋の

門戸開けるを見て其中に入らんとせしに、暴徒の一人彼の髪を捕へて、亂民の中に曳き入れ而して市中を曳き廻はしたりき。彼は市の西端に半ば開きたる家あるを見、其の門に止まりて亂民に向ひ、『諸君は余の語るを聞き給ふべきや』と問ひたりしに、彼等の多くは答へて、『否、否、彼の頭を撻て、彼を殺せ』と叫びたりしが、他のものは云く、『否、我等先づ彼の語るを聞かん』と。彼は問へり、『余は如何なる惡をなしたりしや、余諸君の何れに向て言語若くは行爲に於て害をなしたりしや』と。斯くて彼は凡そ十五分間も語り續けしが、聲涸れて語ること能はざるに至り、彼等は又聲を擧げて、『彼を携へ去れ、彼を携へ去れ』と叫びたりき。彼は再び其力と聲との回復するを待ち、聲を擧げて祈禱を初めたりしが、不思議にも亂民の首魁たりし一人は彼に向て、『余は貴君の爲めに生命を惜まざるべし、余の後に從ひ給へ、爰に在る人々は決して貴君の髪の毛一本にも觸るゝことなかるべし』と云ひたりき。彼等は之を聞て宛も申合せたる如く悉く左右に退き、彼は四五人に保護せられて安全にウエテスベリーに送り返へされたりき。

此の如くウエスレーはウエテスベリー及びウアルサウルに於て大なる迫害を蒙りたりしが、是れ實は彼の大勝利なりき。後幾ならず、チャーレス此地に至りしに、彼は形勢大に變化し、多くの人々の悔改むるを見たりしが、曾て亂民の首魁たりし人も亦其一人なりき。チャーレス彼に向て、彼がウエスレーを如何なる人也と思惟するやを問ひしに、彼は答て、『彼は神の人也、我等多くのものが彼を殺すと能はざりし時、神實に彼と共に在し給ひし也』と云ひたりき。然り、ウエスレーは神の人也、故に彼は人を救ふの大事業をなすに方

り、如何なる困難も恐れざりし也。

ウエスレーは北方に進みてグリムスビーに來り、先づ野外に於て說教し、翌日一家を借り受けんとしたりしが、多くの人々は其結果を恐れて之を拒みたりき。幸に一人の婦人あり、其家を貸さんことを申出でたりき。此婦人は其良人を棄て、不良の生活を爲しつゝありしものなりしが、ウエスレーは基督のなし給ひしことを回想し、其家に往きて、涙を以て主の足を洗ひ、又其髪の毛を以て主の頭を拭ひし罪人なる婦人の物語をなして彼女に語り聞かしめたりしに、彼女は之を聞て痛く其心を撲たれ、ウエスレーの宿所に來り、『救はれんために我何をなすべきや』と問ひたりき。ウエスレーは是に於て答へて、『直ちに爾の良人の許に歸り往くべし』と云へりしが、婦人は答へて、彼女の良人は百哩を隔れるニューカッスルに在りとの事を告げたりき。ウエスレーは霎時默考しつゝありしが、彼も亦翌朝を以てニューカッスルに往くべければ、彼と共に往くべきを語り、遂に彼女を携へて其良人の許に歸らしめたりき。彼は唯群集に說教するを以て足れりとせず、又牧師の職をもなしたりし也。

斯くして千七百四十三年は何時しか暮れて四十四年となりしが、ウエスレーと彼の同勞者とは此年も亦酷しき迫害を蒙りたりき。而して其迫害は唯に會堂を破壞し、財產を掠奪するのみに非ず、生命にも危害を加へ、一人の說教者は爲に大なる傷を受け、又一人は水中に投せられ殆ど死に瀕するに至りたりき。ダーラストンに於てはメソヂストの婦人を虐待し又之を凌辱し、ウアルサウルに於てはメソヂスト教徒の家と見れば悉く之を破壞し、又其器具を奪ひ去りたりき。此迫害に逢ひたる男女等は其宿るべき家もなく、東西に彷徨し

たりしが、彼等は之が爲めに少しも其志を挫くことなく、迫害者等が新しき信仰の道を棄てよと脅せば、彼等は答へて、『我等既に財産を失へり、此上は生命を棄てんのみ、我等豈良心に背きて生命を惜むものならんや』と云ひて自若たりき。

メソヂスト教徒は斯くの如く迫害せられたりしが、何人も之に同情を寄する者なく、輿論は悉くメソヂストの敵にして、彼等の行爲と精神とは種々に讒誣せられたりき。即ち當時の新聞雜誌は何れも英國教會の味方にして、メソヂスト教徒の事を惡樣に書き立て、官吏は亂民を煽動し、若しくは彼等の迫害を默許したりき。官吏既に然り、況や僧侶おや。彼等はあらゆる手段を以てウエスレー幷に其徒を迫害したりき。此等の迫害に加えて彼等は又僞善者也、謀反人也、欺騙者也とてあらゆる嘲罵を蒙りたりしが、ウエスレーに關する笑ふべき評判の一時多くの人々に信せられたりしは、亦以て當時彼に對する世人の誤解と憎惡の甚しかりしを知るに足るべし。即ち或人はウエスレーは縊死せりと云ひ、或人はウエスレー不法の酒を賣りて告訴せられたりと傳へ、或人は又其のウエスレーは既に死せり、彼はウエスレーの名を騙れる者也と云ひたりき。而して彼は又或時はクエーカー也と呼ばれ、或時はアナバプチスト也と認められ、又或時はジエスイトにして、家に多くの僧侶を蓄へ、窃に英國教會を倒さんと謀れる者也と思惟せられたりき。而して更に笑ふべきは彼が西班牙政府の探偵也と誤解せられたりしことなりき。ウエスレー及び其徒は此の如く當時の政府、社會及ひ國民の反對を受けて迫害せられたりしが、彼等は之れがため毫も失望せざりしのみならず、益々其働の必要を感じて熱心に働きたりき。吾人は此に至りて初代

教會の熱心勇猛なる使徒等を回想せずんばあらず。

ウエスレー救世の事業を初めて既に五年、彼は只管メソヂスト協會の基礎を置くに盡力したりしが、彼の指導の下に彼の事業は驚くべき發達をなし、今や其同勞者と其責任を分つべき時機に到達したりき。是に於て彼は千七百四十四年、即ち彼が齡正に四十一歳の時、彼と其事業を共にしたる英國教會の教師と、福音に於て生れたる彼の子として彼を助けて働きたりし重なる平信徒の説教者等とを倫敦に會して、如何にして神の事業を進行すべきやに就て協議したりき。是れ即ちメソヂスト教會第一の會議(コンフェレンス)にして、其初めて開會せられたるは六月廿五日なりき。此集會に列したりしは六人の教師と四人の平信徒説教者とにして、彼等は前夜共に集りて聖晩餐に與り、翌朝はチャーレス、ウエスレー全會に説教して會議を開きたりき。此の如く此小さき集會は初めより嚴肅と眞面目との精神に充ち、各々深く其責任を感じたりき。而して先づ彼等は左の如き決議をなしたりき。云く『我等は神の面前に在る如くして凡の事を評議せん事、我等は凡てを學ばんとする小兒の如く、又單純なる目的を以て集會せん事、凡ての事根抵より吟味せん事、何人も其心に在る事を腹藏なく語る事、及び凡ての問題は十分に討議し、精密に論議せん事を望む』と。次に彼等は先決問題として『吾人は如何なる點迄他人と一致の決議に服すべきや』との事を議し、『理論上の事に關しては各人其判斷の許す處に從ひ、實際上の事に關しては吾人爲し得る限り、良心の許す處に從て一致すべし』との事を定めたりき。思ふに之に優りて思慮深く、又基督教的精神と一致せる申合なるものは、何れの集會に於ても定むること能はざるべし。

次に彼等は此集會に於て評議すべき事務を三個に區別したりき。即ち（一）メソヂスト協會は何を敎ふべきか、（二）如何に敎ふべきか、（三）何を爲すべきかにして、換言すれば敎義、條例及び實行の三者也。彼等はメソヂスト協會の基礎となすべき敎義の研究に全二日を費したりき。ウエスレー及び彼の朋友等は、悔改、信仰、稱義、聖潔、及び聖靈の證の如き、基督敎的生活に最も重要なる實際的眞理に最も重を置き、新に信仰箇條を作るは彼等の目的には非ざりき。故に彼等は唯從來敎會の看過したりし重要なる敎理を明にしたりしのみにして、彼等の働は神學者のそれよりも證人のそれなりし也。說敎の最良法として此集會に於て、說敎者に推薦せるは、（一）招く事、（二）罪を確認せしむること、（三）基督を示す事、（四）德を建つる事にして、何れの說敎に於ても多少此四者を兼ぬべしとの事なりき。次に此集會に於て莊重に考察せられたりしは英國敎會との關係にして、ウエスレーは尙英國敎會と一致して働き得るの餘地ありと信じ、此精神に從て働くことに決したりき。從て凡ての事に於て監督に從ふべき事、良心の許す限り敎會條例を守るべしとの事を定めたりき。次に彼等が深き注意を以て評決したりしは、メソヂスト協會內の敎規にして、彼等は其精神上の狀態に從て其信徒を四個の團体に分ち、各々之が規則を定めたりき。而して其の最も注目すべきは、メソヂスト協會に入らんとすることは、或特種の宗敎的意見を要するに非ず、唯『來らんとする怒より遁れ、罪より救はれんとの願』を要するのみなる事是也。但し此信徒を信仰の狀態に從ひて區別するの制は、後幾もなく實行せられ難き事明白となり、漸次脩正改良せられて、更に單純なるものとなり、遂に小會なるものとなり

たりき。此小會は經驗ある信徒をして各々若干の會員を監督せしむるの法にして、彼等は吉凶禍福相訪ひ相慰め、貧富强弱相助け相勵まし、此の如くして教會の一致、聖徒の交際を謀りたりき。而してメソヂスト教會の發達は實に此制度に負ふ所甚だ少からざりし也。ウエスレーが事情の必要に迫られ、平信徒をして說教せしむるの法を採用したりしとの事は、吾人の既に前章に述べたる處なるが、今や此事は此集會の問題となりたりき。年會は勿論其必要を認め、且必要の場合には尙平信徒の補助者を用ゐんことをウエスレーに勸めたりき。彼等の職は教師不在の場合に教導、牧養をなす事にして、且彼等は日記を記し、且形式的に流れざるやう注意すべき事を命せられたりき。此の如き人々を養成せん爲めに學校を設くべしとの議もありしが、時未だ熟せざりし爲め、此企は延期せられたりき。當時平信徒の補助者は其數既に五十人に上りしが、ウエスレー及び其友等は未だ深く平信徒說教者の價値を認むるに至らざりき。故に彼等は唯一時の傳道者にして、教師來れば其托せられたる使命は終りたる者と思惟せられたりき。而して彼等の多數は各其職業に從事し、職業の暇を以て傳道したりし也。彼等は單純素朴にして、學問無かりしと雖も、信仰と熱情とに富み、全力を獻げてウエスレーの委したる事業を爲したりき。ウエスレーは彼等を監督、指揮し、各々其働場を定め、又其方法を示したりしが、彼等も亦喜んで彼の指導に從ひたりき。彼が彼等の爲めに定めたりし規則の一條に云く、『凡ての事自己の意志に從ふことなく、福音に於て生れたる子の如く働くべし。故に吾人が定めたる方法に從て其時を用ゆるは汝の義務也。即ち汝は人々を訪ひ、殊に病者を見舞ふべし。又吾人が常に與ふる

助言に從ひ讀書、靜思、祈禱を勤むべし。殊に汝我等と共に主の葡萄園に於て働かば、吾人が最も主の榮光を顯はせりと思ふ時と場所とに於て、吾人の指揮する働をなさんことは最も要用なる事也』と。ウエスレーが此の如く其平信徒たる補助者に向て、絶對的服從を要求したりしは、事情の必要より出でたることにして、即ち彼等は假令熱心にして且信仰に富みしとは云へ、十分の教育を有せざるものなりしかば、此の如き人々に大切なる信徒を委任したりし彼が、自ら監督の如き權威を有したりしは勢止むを得ざりし也。而して彼が說教の欲點を指摘し、又讀書の必要を說きて、說教者智識的修養の忽にすべからざるを示したりしは注目すべき事實也。彼嘗て彼等の一人に書を贈て云く、『汝が說教の才能は七年以前も同樣にして何等の進歩なし。汝の說教には活氣あれ共深遠ならず、變化少く、又思想に乏し。之を矯正するの道唯讀書に加ふるに默想と祈禱とを以てするの外なし。汝之を怠れるが故に斯の如し。汝之れなく〻しては深遠なる說教者となり難し。日々時を定めて修養せよ、さらば汝が嘗て有せざりし趣味を有するに至るべし、初め煩しく思ふとあるべきも後愉快を感ずるに至るべし』と。彼は又傳道上の働に於ても常に彼等を勵ますことを勉めたりき。嘗て彼等の一人其使命に關し疑惑を生じ、彼に書を贈て、何人か其代理となるべき人を送られんことを請ひたりしが、彼答へて云く、『我愛する兄弟よ、君は如何にも其任に適し難しと見ゆ、何となれば君は祈るべき時を、考ふる時に用ゐたれば也』と。彼れは此の如き權威を以て其部下を統率したりしが、威嚴に加ふるに溢るゝ許りの愛情を以てしたりしかば、彼は彼等の監督者、指揮者なりしと共に、眞實なる彼等の朋友として愛敬

せられたりき。

此會議は數日の間繼續し、重要なる問題を議了したる後、其會員は各其はたらき場に歸りたりき。此會議は形式を備へたる宗教會議に非らず、其目的單に教會を振興し、靈魂を救ふ最良の道如何を研究するに止り、一教派を組織する抔の目的は更に之れなかりき。當時メソヂスト協會の成功は意外にして、前既に述べたる如く說教者の數五十人に餘り、會員の數も數千に及び、倫敦のみにても凡そ二千二百人に達したりき。ウエスレーは英蘭全体を巡回說教し、北はニューカッスルより、西南は國の邊端に及び、倫敦、ブリストル、セントアイブス、及びニューカッスルは其運動の中心にして、後ウエチスベリーも亦其地方の中心となりたりき。ウエスレーは此等の地に至り、昔主耶蘇がなし給ひし如く、自ら主として貧賤にして世人



の顧みざる人々に說教したりき。彼が如何に成効したりしかは吾人の既に上に述べたる如くにして、素より反對も少からず、既に述べたる如く諸處に於て種々の迫害を蒙りたりしが、英國人民は漸く福音の必要を悟り、ウエスレーの說く處に耳を傾くるもの漸次增加するに至りたりき。彼は素より徒に人々を喜ばすが如き言語を弄したるに非ず。彼は人に諂ふには其性格あまりに高潔にして、心にもなき事を言ふにはあまりに誠實なりき。故に彼は制し難き亂民の中に在ても、決して哀を請ふが如き言語を發せざりき。夫の亂民等が初めは猛獅の如き勢を以て彼を襲擊したりしも、後遂に處女の如くなりて去りしものは、彼の道德的勢力の然らしむる所にして、彼が渾身の愛を以て語る大膽にして權威ある言語には、何人も敵することを得ざし也。

吾人がメソヂスト運動の開始と稱する時期は此集會を以て終りたり。吾人は尙進んで此始められたる運動が如何に生長發達するかを見るべし。



## 第七章　事業の發達

千七百四十四年八月ウエスレーはオックスフオルド大學に於て、說敎するの機會を得たりしを以て、彼は敎會に地位を有する人々に向ひ、福音的敎義を說き、且丁重にして而かも强き言語を以て、彼等各々が其特別に負へる義務を盡すべしとのことを勸告したりき。彼其日誌に書して云く、『余は說敎せり、思ふに是れ余がセントメリーに於て說敎するの最後なるべし。さもあればあれ、余は今此等の人々の血と關係あることなし、余は全く余が心血を濺ぎたり』と。彼は尙地位あり、敎育ある人々に向て福音を宣ぶるの機會を有したりしかども、彼は天より與へられたる彼が特別の使命は『小さき者』に傳道することを忘れざりき。故に彼は尙傳道旅行を繼續し、堪へ難き冬の嚴寒も尙之を恐れざりき。當時道路甚險惡にして、殊に北部地方は最も甚しく、ヨーク市以北には全く交通の便なかりき。故にウエスレーは常に馬上にて旅行したりしが、此險惡なる道路は冬に至り、融雪の爲めに一層の險惡を加へ、且河水膨脹したるが爲めに其生命を危くせんとしたりしことも一再のみには非ざりき。千七百四十五年二月彼は二回此の如き危險の旅行をなしたりき。彼其日誌に記して云く、『余は嘗て多くの危險なる旅行をなしたれ共、未だ此の如き旅行には遭遇せざりき。余は風と雹と雨と氷と雪と雪雨と身を劈くが如き寒氣の間を旅行したり。然れ共今や了れり。再び

此の如きことはあらざるべし』と。彼は此の如き困難に處して泰然として心を動かざりき。之に繼ぐの成效は其困難を償ふて尙餘りありければ也。且彼は此大事業に全く其心血を注ぎたりしが故に、困難をも困難と感せざりし也。彼は唯に多くの群集に向て說敎したりしのみに非ず、凡そ主の爲めに働く機會あれば如何なる小機會にても之を利用したりき。即ち彼は馬上にて旅行しつゝありし間も、同行者あれば直ちに之と談話を交へて、漸次宗敎上の談話に及ぼし、又食堂若しくは旅館の客室に在て少しの機會あれば直ちに彼等に傳道せんことを努めたりき。而して彼の快活なる性質と巧なる談話の力とは、多くの人々を彼の周圍に集め、彼の評判と彼に關する諸說とは公衆の好奇心を引き、彼を見、彼と語らんため態々遠方より來りしものも少からざりき。彼等の中には彼に對し惡意を挾みて來りしものもありしが、一たび彼に接したるものは、彼の剛毅にして且誠實なる容貌を見て直ちに其心を翻したりき。

千七百四十五年春彼はコーンウォールに向て旅行したりしが、聖ジエンニス敎會の牧師タムソンは、喜で彼を迎へ彼をして其講壇に立たしめたりき。此人は爾後長くウエスレー最良の友人なりき。然れ共其他の僧侶と政府の官吏とは一般にウエスレーに反對し、遂にメソヂスト說敎者の一人なるマックスフイルドを捕へて獄に投じたりき。ウエスレーは之を救はんとして却て其捕ふる所となりしかども、幸にして放免せられたりき。翌日彼はファルマウスに至り、或病婦人を訪へる時、亂民に圍まれて非常の危難に逢ひたりしかども、此處にても亦彼は亂民の中に出でて彼等に說敎し、其良心に訴へて其危難を免れたりき。彼は又トルヤンに於て高き丘に立ちて野外說敎

をなせる時、亂民のため丘上より投げ出されしが、幸にして大なる害をば受けざりき。スチシアンに於ても彼は亦其地の官吏の爲め妨害を蒙りたりしかども、彼のコーン・ウォールに於る傳道は大成功にして、大に人心を覺醒したりき。

ウエスレーはコーンウォールを去て海峽を横り、ウエールスに向ひたりしが、此地は彼が經來りし地方とは全く異り、極めて平和靜穩なりき。ウエスレーが斯く一方に其傳道を繼續しつゝありし間、彼の同勞者も亦迫害の中に其働をなし、殊にチャーレスは自ら陣頭に立ちて勇しき働をなしたりき。而して彼等の働は時代の要求に應じたりしが故に、一時劇しき迫害を受けたりしに拘はらず、何處に於ても大成功なりき。夫の智識と學力に乏しき說敎者等の成功したりしことは、ウエスレーも亦意外として驚歎せる處なりき。

大陸に在る英國軍隊の中に、メソヂスト信徒起れりとの吉報の達したりしは此時の事なりき。此時西班牙王位相續の戰爭起り、英國はマリア、テレサを助けんとして、此戰爭に加はりたりしが、英軍の中に曾てメソヂストの說敎を聞て之を信じたる數人の兵士あり、彼等は戰陣に在て大に其信仰をもやし、其同僚に向て說敎を初めたりき。其重なる人々はジョン、エバンス、ジョン、ハイム、サンプソン、スタニホース、マーク、ボンド等なりしが、彼等の說敎は意外の効果を奏し、各聯隊に於て悔改者を生じ、其數忽にして三百以上に達したりき。彼等の中最も敬虔にして且智識に富める者七人は說敎者となりしが、ジョン、ハイムは其中最も有力なる者にして、長官の許可を得て毎日四五回陣中に於て說敎したりき。千七百四十五年四月卅日ホンテノイに於て大激戰ありし時、メソヂストの兵士等

は基督教の兵士は如何に勇敢なるものなるかを其同僚に示したりしが、四人の説教者と無數の兵士とは之れがため敢なくも戰場の露と消えたりき。重傷を負へる一人の兵士其同僚に言て云く、『余は今耶蘇の胸に息まんため往かんとす』と。他の兵士は其最後に臨で云く、『來れ、主耶蘇よ、速に來れ』と。ジョン、エバンスは大砲の爲め其兩脚を挫かれて仆れたりしが、彼は死する迄神を讃美し、又其周圍に在る人々を勵まして止まざりき。此の如くメソヂストの兵士は此戰爭に於て多く戰死したりしが、又幸に生きて歸りし者も少からず、彼等はメソヂスト教會に入り、又説教者となりたるものもありき。此時英國は又チャーレス、エドワード、スチユアートが蘇格蘭に起りて王位を覬覦せしより大なる騷擾を極めたりき。而して初は其軍甚だ振ひ、遂にエヂンバルクを陷れ、將さに英蘭の北部を襲はんと



したりき。ウエスレーは純粹の英蘭人にして、若しスチユアートにして勝利を得ば、羅馬教勝利を得、爲めに英國の自由を危くするの恐れあるを知り、全力を盡して國王を助け國民の利益を謀らんとしたりき。ニューカッスルは英蘭の北部に在りて、敵軍侵襲の衝に當れるを以て、彼は敵兵將さに英蘭を襲はんとするの報に接するや、自らニューカッスルに至り、人民を奬勵慰籍するに努めたりき。彼は到着するや先づ市長に書翰を贈りて其忠誠を誓ひ、且守兵に向て説教せんことを請ひたりしが、其將官之を許さざりしを以て、彼は止むを得ず、毎日野外に於て説教し、其切迫せる危急の狀態を説て大に市民の心を警醒したりき。彼が國家の危急に際して此の如き働をなしたりしは吾人の記憶すべき處也とす。

説教はウエスレーの主として用ゐたる武器なりしが、彼は又初めよ

り文學の力を知り、之を用ゐて傳道をなしたりき。思ふに彼程文學の必要を知り、又之を用ゐたりし者は他に甚少かるべし。彼は此頃『道理を知り宗教を信ずる人々に訴ふ』と題する一篇を二回に分ちて出版したりしが、此書はメソヂスト運動に就て、力と雄辯とを以て世人に訴へたるものたりき。彼は又簡短なる雜書を多く出版し、其說教者等をして數十部を英國の各地に分配せしめたりき。此雜書分配は今日普く行はるゝ處なるが、之を創始したりしはウエスレーなりき。吾人は彼の功を忘る可らず。

メソヂスト運動は意外に長足の進歩を爲したりき。ウエスレーは於是自ら監督の地位に立ち、說教者のみならず、其無數の協會を統御したりき。而して彼が其職務を行ふや使徒的精神を以てし、福音を宣傳すると共に、深く各協會の動靜に注意し、嚴格に之を律すると

を努めたりき。凡そ宗教的復興なるものには種々の結果の伴ふものにして、法外なる思想の行はるゝことも少からず。此の如き時に方りては人々飢渴の如く義を慕ふが故に、飢渴者の飲食を撰むに暇あらざる如く、不健全にして且危險なる教に惑はされ易し。此時既にメソヂスト運動には夫の不健全なる靜寂主義伴ひたりき。ウエスレーは之を看取したりしを以て、之を防遏する爲めに大なる力を用ゐたりき。殊にノッチングハムの協會に於ては斯の如き思想の入り來りたる結果として、甚だ不滿足なる狀態に陷りたりき。於是ウエスレートは千七百四十六年三月斷然不健全の分子を其協會より放逐したりき。ウエチスベリー及びビルミングハムに於ても、律法不用を唱ふる一派のもの入り來りて、不健全なる思想を協會內に注入したりき。故にウエスレーは斯る說の甚だ危險なる事を論じ、且斯る說を

唱ふるものを驅逐するに努めたりき。又倫敦に於ては自ら預言し、且方言を語る力を有せりと稱する一派顯はれ出てたりしが、ツエスレトは之をも排斥したりき。

千七百四十六年の春ウエスレーは西南地方に傳道したりしが、彼の働は至る處に成功したりき。即ちウエールスに於ては彼を歡迎し、前年彼を迫害したりしコーンウオールは今や形勢一變して、前の迫害者も今は多く悔改めてメソヂスト協會に加入したりき。而して各協會は至る處基礎漸く鞏固となり、ウエスレーの事業の永續すべき事益々明白となりたりき。

同年冬ウエスレーは嚴寒をも意とせず、北方傳道に向ひたりしが、彼が過ぐる所の協會は何れも非常なる進歩を示したりき。千七百四十七年二月廿四日彼は左の如く記したりき。云く、『余は此日テトヂーに在る小協會を調査したりしが、余は英國に於て他に此小協會の如き者あるを見ざりき。余は貧民に施したる寄附金額を記せる小會記錄を見しに、或人は一週に八ペンス、或人は十ペンス、或人は十三ペンス、十五ペンス、或人は十八ペンス、或人は一シルリング又は二シルリングを寄附せしを見たり。余は小會長ミカ、エルムーアに向ひ、此協會は英國に於て最も富める者なりやと問ひしに、彼は答へて、余はしか思はず、然れ共我等は皆一致して、己と其有する凡てを神に献げんと決心し、而して喜んで之を爲せり、故に我等は常にテトヂーに來る衣食にも究するが如き旅人を養ひ得る也と云へり』と。メソヂスト教會は初めより此の如き信者を有したりき。其將來の運命は既に此時に於て定まりたりし也。

北部の協會は一般に進歩、繁榮の狀態に在りき。ニューカッスルに

於ては會員互に一致調和し、會員外のものも說敎に耳を傾け、上流社會の中にもメソヂストに對する僻見漸次薄らぎ來りたりき。レーヅはチルソンが初めてメソヂズムを植付けたりし處にして、ウエスレー至るに及びて更に大に人心を覺醒したりき。ウエスレーが初めてケーレーに來りし時は會員僅に十名に過ぎざりしが、今や增して二百名となりたりき。夫の有名なる工業地マンチエスターに於てもウエスレーは野外に於て數千の人々に說敎したりしに、說敎の將に終らんとする時二三の人々に妨げられたりしが、是は此行ウエスレーの受けたりし唯一の妨害にして、人々のウエスレーに對する感情は大に變化し來りたりき。ウエスレーは又此年夏に至りて西南地方を旅行したりしが人々のウエスレーに對する感情は、此地方に於ても亦著しき變化を生じたりき。是に於てウエスレーは希望春の如きを感じたりき。

愛蘭は曾て聖徒の島と呼ばれ、宗敎上長く歐羅巴諸洲の先進國なりしが、第十六世紀宗敎改革の氣運に反對したりしが爲め、遂に蘇、英二州の後に落ちたりき。而して是唯宗敎上の不幸なりしのみならず、延て社會上、政治上に及び、國民は迷信の鉄鎖に繫がれ、國運の進暢全く止りて災害荐りに至るの狀態に陷りたりき。凡そ機會なるものは一たび失へば、容易に恢復し難き者にして、斯の如く一たび英、蘇の後に落ちたりし愛蘭は再び二州と並馳する事素より容易に非ず。若し愛蘭にして此望ありとせば恐らく福音の宣傳より外あらざるべし。ウエスレーは既に英蘭に於て至る處に成効し、洋々たる希望に滿ちたりしが、彼れ以爲らく、愛蘭と雖も若し彼を納け福音を信ぜば、再生の望なきに非ずと。於是彼は愛蘭傳道を思ひ立ち

たりき。勿論英國教會は是より前既に愛蘭に布教し、其改宗を謀りつゝありしかども、彼等は國家と提携して人民を壓制する器たるに過ぎざりき。中には熱心と敬虔とに富みたる高僧なきに非ざりしかども、彼等は國家と關係を有したりしが爲め、充分の感化を國民に及ぼすこと能はざりき。ウエスレーは此狀態を見て、尙自己が働くべき餘地の存するを思ひ、遂に自ら愛蘭に向て出發し、千七百四十七年八月九日（日曜日）ダブリンに到着し、同日午後招かれてセント、メリー教會に於て說教したりき。是より前メソヂスト平信徒說教者の一人なるトマス、ウイリアムスは既にウエスレーに先ちて此地に來り、數月傳道の後凡そ三百人の會員を有する一協會を組織したりき。ウエスレーは例に依り彼等各自の精神的狀態を査察し、又多くの人々に向て、以前ルーテル教會の所有に係りし會堂、及び野外に於て說教したりしが、至る處に歡迎せられ、熱心を以て其說教を傾聽せられたりしは彼の深く驚愕せし處なりき。彼は斯くして二週間を此地に費し、尙向後力を盡して此地に傳道せんとの決心を以て、惜しき別を告げたりき。彼が此最初の來遊に於て得たりし印象は、愛蘭人の英國人に比して溫順教へ易しとの事にして、彼は『是れ如何なる國民ぞや、男子も女子も小兒も唯に忍耐を以てのみに非ず、感謝を以て奬勵の言を受けたり』と叫びたりき。然れ共彼が此觀察は後幾ならずして多少變化するを免れざりき。

ウエスレー去て後二週間チャーレスも亦愛蘭に來りしが、雲時にしてダブリン市民はウエスレーに反抗の念を起し、亂民蜂起して會堂を刼掠し、講壇・腰掛を燒き、メソヂスト信徒を迫害したりき。而して官吏は之を默許し、判事は首謀者を放免して却て暴行を敎唆し、

たりき。チャーレスは此間に立ちて此劇しき襲撃の衝に當りたりしが、之が爲めに其生命を失ひし者も少からず、チャーレスを保護せんとしたる一巡査の如きは、亂民の爲めに殺され、其の屍体は市中に曳き回はされ、剰え群集の場所に梟せられたりき。首謀者は一度捕はれて法廷に曳かれたりしが、何れも例に依て放免せられたりき。然れ共神の民等は斯る迫害の中に立ちて尙信仰と勇氣とを失はざりしが、幾もなくして迫害も止み、事業は再び平和の中に進行したりき。

此時よりメソヂストの傳道者はダブリンのみに非ず、愛蘭州中を東西に奔走して傳道したりき。素より彼等は幾多の困難にも遭遇したりしが、成功も亦之に伴ひたりき。殊にチャーレスの讃美歌は音樂に趣味を有する愛蘭人の稱讃を受け、之が爲めに多くの人々を引きたりき。左に記する二個の物語はメソヂストの讃美歌が愛蘭人に如何なる効果を與へたりしかを證すべし。

ウエッキスフォルドに於ける小協會は羅馬教徒の迫害を蒙りたるが爲め、竊に或民家の穀倉に於て集會を開きたりしが、迫害者の一人は集會前竊に穀倉内に潛伏し、集會初まるを待ちて中より戸を開き、迫害者を入るべしとの事を其一味の者等に約束したりき。而して集會の當日に至り竊に倉内に入り、古き麓の中に身を隱し、時の至るを待ちたりしが、やがて集會は開かれ、讃美歌初まりしが、彼は其歌の美と力とに痛く其心を撲たれ、自己の此處に來りし目的を忘れて終り迄之を傾聽したりき。讃美歌終りて、彼は又祈禱に耳を傾けたりしが、此時彼の心は既に釋けて悔恨の情に堪えず、其身体は振へ、其呻吟の聲は外に洩れたりき。會衆は驚きて何事ならんと見れ

ば、憐れなる愛蘭人の悔悟の念に滿ちて熱心に祈りつゝあるなりき。彼は彼等に向て情を告げて彼の爲めに祈らん事を請ひ、此時より全く悔改めて長くウエッキスフォルド協會の會員となりたりき。之と同時頃音樂を嗜める一人の稅吏はメソヂストの讃美歌を聞かんがため或集會に來りしが、彼は讃美歌の外何事をも聞くを好まず、故に歌の終るや否や手を以て其兩耳を蔽ひたりしが、偶々蠅の鼻上に來り止るに逢ひ、覺えず耳より手を放ちて之を追ひたりしに、其刹那説教者は『耳ありて聽ゆる者は聽くべし』との聖語を讀みつゝありき。彼は此語を聞て好奇心に勵まされ、遂に其説教を聞き了り、深く福音の眞理に其良心を撲たれ、遂に悔改むるに至りたりき。千七百四十八年三月ジョン、ウエスレーは再び愛蘭に來り、人々の歡迎を受けたりき。彼のダブリンに着するや直にチャーレスが集會所に用ゐたりし禮拜場に至り、説教を初めたりしが、初め數分時間は人々の喧騒と讃美の聲に妨げられて彼の聲聞えざる程なりき。彼は三ヶ月間愛蘭に止り、其重なる市邑を巡り、毎朝五時に説教したりしが、概して至る所に人民の好意を受けたりき。而して彼は至る處に於て野外説教を爲したりしが、聽衆は多く羅馬教徒及びプロテスタント教徒なりき。アスロンに於て彼は窓より無數の人々に演説したりしが、聽衆の過半は羅馬教徒にして、熱心に彼の説ける語に耳を傾けたりき。彼其日記に記して云く、『余は未だ斯の如く靜肅にして謹聽せる會衆を見ざりき。然り、愛蘭人の如く概して禮儀ある人民は歐羅巴に於ても、亞米利加に於ても未だ曾て見ざりき』と。後二日彼は又記して云く、『會衆の多數は落涙しつゝありき』と。彼は又云ふ、『大抵凡ての市邑は動きて我等に厚意を表し、又救を欲す

るの願に充てるが如く見えたりき』と。然れ共彼は斯くの如き外形に依て欺かれざりき。故に彼は又云ふ、『水は深からんにはあまり廣くひろがり過ぎたり』と。彼は此時より愛蘭人の性質は快活なれ共移り易きを發見したりき。故に彼は人々の彼に好意を表するを以て足れりとせず、直ちに彼等の根柢に横はる宗教的無頓着の性情を衝かんと試みたりき。於是彼は其説教の法を變へ、律法の恐ろしきことを説きたりき。彼云く、『余は余の爲し得る限り最も强き方法に由りて主の恐るべきことを説教せり。然れ共一言一語を食ひ盡せる彼等は尙之を消化せざりしが如し』と。然れ共アスロンに於ける彼の働は着々功を奏し、有望なる協會の基礎を置くを得たりき。而して彼の此處を去るときは、人々皆深く別を惜み、群集は皆涙を流して彼に別を告げたりき。此の如きは彼の生涯に於て珍らしき事には非ざりしかど、別けても此地に於ける訣別は深く彼の心を動したりき。

ヒリップスタウンに於てウエスレーは又一小協會を組織したりしが、其會員の多數は此地の守兵なりき。又クララに於て彼が初めて説教したりし時、彼に聽きたる會衆の多くは富みたる人々なりき。彼は曾て鬪鷄を見んが爲め人々の集りたる場所に於て説教したりしが、彼等は止りて彼の説教を聞き、遂に其遊戯を忘れたることありき。又リメリックに於ては彼の説教せんとせる場所に於て、舞踏を初むるものありしが、彼の説教の初まるや、舞踏者は舞踏を棄て、來りて彼の説教を聽きたりき。タルラモーアに於ては、彼が野外に於いて無數の群集に説教しつゝありし時、霰降り來りしが、彼等は此處を去らざりしのみならず、脫帽の儘彼の説教を聞き了りたりき。ウエスレーは數個の强固なる協會を組織し、又多數の説教者を起し

て愛蘭を去りたりき。而して幾ならずしてチャーレス來りて、愛蘭に於ける傳道事業を總監し、先づ西南の首都コルクに至りたりき。初めは會衆一萬に餘り、忽ち二百の會員を有する協會を組織するに至りしが、輕佻なる人心は未だ幾ならずしてウエスレーに背き、此地は愛蘭に於けるメソヂスムの戰場となりたりき。此地にバットラーと云へる俳優ありしが、ウエスレー來りて福音を傳へたりしより、其見物人の減少したるを憤り、市民を煽動して基督教に反對せしめたりき。彼は身に僧服を着け、手に聖書と俗歌集とを携へ、街頭に出でて、懶惰、無賴の徒を集め、あらゆる惡口罵詈の言を以て說教者を譏誚したりしが、彼れ元來辨口を有せしかば、忽ちコーク市の名物男となり、其得意の詭辯に依り譏誚を逞ふし、下等社會を籠絡して、如何なる暴行をも敢てせしむるに至りたりき。是に於て暴民の一隊棍棒と劍とを携へ、市中を橫行し、メソヂスト教徒の家々を掠め、又メソヂストの徒と見れば、男女老幼に拘はらず、街上に於て之を襲擊し、屢々死に至るの傷を負しめたりき。然るに市長は之を制せざりしのみならず、却て之を奬勵し、メソヂストの人民が其危害を訴ふるや、彼は平然として答へて云く、『是れ汝等が斯る說教者を厚遇するが爲めにして、自ら招くの禍也。汝等もし彼等を屋外に放逐せば其害を免るべし。然らずんば汝等自ら其受くべき禍害を受けざる可らず』と。市長既に此の如し。於是亂民等は少しも憚る處なく、益々兇暴を逞ふし、メソヂストの徒を殺戮するは正當にして賞すべき行爲也と公言するに至りたりき。裁判所も亦メソヂスト教徒の訴訟を受理せず、却て之を罰したりき。是に於て彼等は之を高等法院に訴へ初めて公明の裁判を得たりしかども、迫害は尙止ま

ず、千七百五十年ジョン、ウエスレーのコークに來りし時、彼は劇しき襲擊を蒙りたりき。即ち彼等は會堂を襲ひ、椅子、腰掛を携へ出し、床、戸及窓框等を毀ち、或は之を携へ往きて自家の用に供し、或は街上に於て燒棄したりき。斯の如くして日々迫害のあらざるなく、ロージャー、オフアーラルの如きは市場に廣告して、何時にてもメソヂスト敎徒を襲擊する亂民の巨魁たるべしと云ふに至りたりき。而して市長は更に之を制止せんとせず、僧侶も亦常に之を敎唆して止まざりき。然れ共此の如くして久しく續きたりし迫害も漸次減少し、幾もなくして全滅し、メソヂストは益々盛大に赴きたりき。後ウエスレーが再び此地に來るや、人心全く變化し、市長自らウエスレーを其重なる旅館に歡迎するに至りたりき。

愛蘭の他の地方に於てもメソヂスムは益々進歩し、唯に南部のみにあらず、北方も亦說敎者等の熱心なる働に依て敎化せられたりき。

愛蘭初代メソヂスムの歷史は、勇敢なる行爲の歷史にして、メソヂストの說敎者等は幾多の危險と困難を犯して國民の敎化に任じ、中には迫害のために其生命を失ひたるものありき。マクベルチーの如きは其一人にして、彼は亂民より受けたる重傷の爲め數ヶ月間惱みたる後死したりしが、彼は彼等の足下に踏まれし時『神よ彼等を赦し給へ、我も赦せば』と祈りたりき。又トマス、ワルシは愛蘭メソヂストの使徒と呼ばれたる人にして、彼の成功したるは其高潔なる生活と其快活なる性質と其富瞻なる智識とに依りしが、彼も亦屢々危險に遭遇したりき。

ウエスレーの愛蘭に於る傳道法を見るに、彼は羅馬敎徒との衝突を避けん爲め、其敎理の誤謬を指摘することをせず、福音の大眞理を

說き、主として人の良心に訴へんことを努めたりき。彼が多くの羅馬教徒を基督に導きたりしは實に此賢き方法に由りたりき。道を異教徒に傳へんとする者、彼に學ぶ所なくんばあらず。

## 第八章　長足の進歩

吾人は再び英國に於けるウエスレーの働にかへるべし。英國教會の僧侶は尙彼に對して反情を有し、彼を攻擊して止まざりしと雖も、彼等の中亦或者は彼に同情を寄するに至れり。其中最も著名なるものを倫敦聖バーソロミユー教會の牧師ベートマン、コンウォール、聖ゲンニス教會の牧師タムソン、シオールハム教會の牧師ヴインセント、バーロチツト及びヨークシーア、ハウオース教會の牧師ウイリアム、グリムシヤウ也とす。彼等は其同僚の非議、反對を顧みず、ウエスレーをして其講壇に立たしめ、或は其他の方法に依りて百方彼を助けたりき。トムソンが嘗てウエスレーを迫害の中に救ふや、其同僚は悉く彼に反對し、監督は彼尙もしウエスレーを助けなば其職を褫奪すべしと云ひて之を威嚇したりしが、彼は毫も恐るゝ所なく、平然法衣を脫し其脚下に擲ちて答へて云く、『余は法衣なくとも說教し得べし』と。バーロチツトも亦ウエスレー親友の一人にして、彼も亦其の子孫が英國教會に媚びて名譽と利達を得んよりも、寧ろウエスレーの徒となりて困難と危險とに遭遇せんことを望むと云へり。ウエスレーのヨークシーアに傳道するや、グリムシヤウ常に東道の主人たりき。千七百四十八年ウエスレー、ヨークシーアに入り野外に說教するや、亂民起りて彼を鞭ち殆ど死せしめんとするに至りたりき。官吏ウエスレーに再び來りて說教することなからんこと

を誓はしむ。彼答て云く、『斯る誓約を爲さんよりも余は寧ろ余の手を斬り去られんのみ』と。彼は亂民の爲めに泥土をあびせられ、又屢々地に打ち仆されたりき。而してグリムスシャウも亦迫害を免れざりき。

千七百五十七年神は英國教會より最も有力なる一僧侶を撰みて、ウエスレーの補助者として與へ給へり。彼其名をジョン、ウィリヤム、フレッチャーと云ふ。高貴、神聖の性格を有するを以て顯はる。一傳記者曾てメソヂスト教會創業者の特質を論じて云く、『もしウエスレーを以て大導者、大機關手也となさば、チャーレスは大詩人にして、ホイットフイルドは大説教家なりしならん。而して神聖の最高標準は疑もなくフレッチャーなりき。恐らくは基督教起りて以來、基督に在りし人の中に、基督の其儘に寫されたる心はフレッチャーを措て他に之れあらざるべし。彼を以て善良なるクリスチャン也と云ふは、未だ以て彼を十分に顯はしたるものに非ず。彼はクリスチャンよりも以上也、彼は全く基督の如くなりし也』と。亦以て其爲人を知るべし。斯る高貴なる人が、反對せる多數の中より與へられたるは、ウエスレーの最も喜べる所なりき。彼は當時尚未だ英國教會僧侶の遂に彼の運動に左袒するの日來るべしとの希望を棄てざりき。故に彼は千七百五十六年『僧侶に贈る文』一篇を草し、彼等の反省を促したりき。然れ共彼の希望は空しく、彼等は依然として彼に反對したりき。

斯くウエスレーは英國教會の僧侶の同情を得ること能はざりしと雖も、彼の事業は至る所に成功し、進歩したりき。彼の日誌は當時彼が如何に東奔西奔して傳道の大業に從事したりしかの記事を以て滿てり。

吾人今一々之を記載すること能はず、唯數個の事實を擧示するを以て滿足せざる可らず。

ウエスレーの初めて蘇格蘭に至りしは、千七百五十一年の事なりしが、當時ホイットフイルド彼に警告して云く、『アルメニアン神學は恐らく蘇國民の受くる所とならざるべし』と。彼答へて云く、『余は基督教を宣傳せんとす、アルメニアン神學を宣傳せんことを求めず』と。彼の至るや聽衆は至る處彼に傾聽したりしが、彼に對する甚だ冷淡を極めたりき。彼の再び蘇國に航するや、長老教會に於て多衆に說教し、又至る處尊敬を以て歡迎せられたりき。而して彼は數箇の小協會を組織したりしが、英蘭に於けるが如き成効は之に伴ふこと能はざりき。是れ一は蘇國民特殊の性質に依るべしと雖も、其宗教上の狀態迫に英蘭人民に優り、精神的改革を要すること甚だ少かりしは其最も大なる原因なりしなるべし。

英蘭に於ては千七百五十年以後形勢漸く一變し、曾てウエスレーを迫害したりし者も、今は熱心なるメソヂスト教徒となり、協會は組織せられ、會堂は建設せられ、人々のウエスレーに對する感情は著しく變化するに至れり。バーミングハム然りき。ウエチスベリー、ダラストン然りき。ウエークフイルド、チエスター然りき。チヤールトン、ホーンバイ、マンチエスター、ケーレー、ヨーク、シエッフイルド、ウアンヅウオルス悉く然りき。曾て彼を聖餐の席より退けたりし。エブウオスの教會も、亦彼を歡迎して彼に傾聽するに至りたりき。此の如く彼は至る處に形勢の一變するを見たり。彼は唯に彼に對する感情の變化を見たりしのみならず、亦人心漸く警發せられ、神の恩寵漸く國民に洽からんとするを見たり。故に彼エブウ

オスに在る時記して云く、『余は唯協會の增加に依りて神の事業の進歩を計算するの誤れるを悟れり。此處に在る協會は大ならずと雖も、神は全市にはたらき給へり。安息日を犯す者、酒に醉ふ者は最早此地に於て見る可らず。呪咀と褻瀆の言とは唯稀に聞くのみ。罪惡は既に其頭を匿せり、誰れか神の遂に全く之を取り去り給ふを知らざらんや』と。但し迫害は全く止みたりしといふに非ず。セフトン及びギルトン等に於ては尙亂民蜂起してウエスレーを攻擊したりしが、彼は獅子の如く大膽に、羊の如く柔和にして之に處したりき。彼のジユースベリーに於て說敎せる時、一人の惡漢突然聽衆の中より躍り出で、力を極めて彼の頰を撲ちたりしかば、彼は痛さに堪えず、覺えず落涙したりしが、彼は直ちに他の頰を彼に向けたりき。惡漢は事の意外に驚き、自ら恥ぢて其顏を匿したりしが、此時より遂に熱心なるメソヂストの友となりたりき。

斯く迫害未だ全く息みしに非ずと雖も、メソヂスト運動の成効は最早疑ふ可らず。メソヂストは最早數人の心に萠せる嫩芽に非ずして、多くの人心に深く其根抵を有せる亭々たる大樹也。然れ共此繁榮の中に又多少の憂ふべきものなかりしに非ず。其協會の中には誤りたる敎義を奉じ、若しくは他の過失に陷いりたるものありき。ウエスレーは此等の誤謬、過失を矯正するに其全力を用ゐ、之を指摘して會友の反省を求め、若し聞かざるものあれば猶豫なく之を放逐したりき。彼は又協會內に秩序を亂るものあれば、直ちに往きて之が救治策を施すを常としたりき。嘗てブリストルに於て內部の紛亂に由り、會員半數に減少せしことありしが、彼は之を救治せんが爲め、特別斷食を爲すべき事を命じたりしに、其結果信仰の復興を來し、

遂に分離せる、會員を復歸せしむるを得たりき。ウエスレーをして最も憂慮に堪えざらしめしものは、無益なる神學上の論辯に耽り、人をして實際的敬虔の生活より離れしむることなりき。此の如き教師は既にメソヂストの協會に入り、スタッフォルドシーアの如きは之が爲に多くの損害を受けたりき。ウエスレーは此の如き精神にして一たびメソヂストを支配せば、其害の甚だ恐るべきを思ひ、最も多くの力を之れが根絶に盡したりき。メソヂスト教徒の中には尙法外なるカルヴィニズムを信ずるものあり。彼等は自らホイットフィルドの徒也と稱せしかども、ホイットフィルドも尙彼等の法外なる說には贊成せざりき。ウエスレーとホイットフィルドとの交情は當時甚だ暖にして、彼等は互に往復し、且屢々其講壇を交換したりき。ウエスレー此頃倫敦に往きたりしが、自ら記して云く、『ホイットフィルド氏來り訪へり、今や我等の間には復爭論あることなく、互に相愛し、主の道の爲め共に手を携へて働きつゝあり』と。異に依て爭はずして、同に依て和す。保羅の『主の僕は爭はず』の意を得たりといふべし。

今やウエスレーは不惑の齡を過ぎて知命に近からんとす。而して彼は尙未だ青年の熱心と活動とを失はず。毎年少くとも五千哩を旅行し、風雨寒暑嘗て意に介せず。毎日二回若くは三回說教し、毎朝必ず五時に說教するを常とせり。而して彼は旅行中嘗て讀書を廢せず、馬上常に卷を手にせり。彼の讀む所の書は各種に涉り、神學、歷史、文學、科學一として涉獵せざるなく、其文學的趣味尙津々として衰へず、古文學は尙彼の最も愛讀せる所のものなりき。思ふに彼の如く博覽多讀せるものは古來甚だ多からざる也。而して彼の書を讀む

や常に獨自の見を有し、精密にして且健全なる判斷力を有したりしは、彼の日記の証する所也。

彼がメソヂストの創業者として有したりし荷物は甚だ重かりき。彼は嘗て自ら云へりき、『余が千絲の毛髮よりも多き百千の憂慮は余の周圍に蝟集す』と。而かも彼は其快活なる性情に由りて、其重荷を最も輕快に荷ひたりき。彼が嗔和靜穩にして且豁達なりしは、彼を知るもの丶共に承認する所なりき。アレキサンダー、ノックスは彼の徒に非ざりしかども、廿年間彼と最も親厚なる交を結びたりし人也。彼に就て嘗て語りて云く、『彼の談話と容貌とは常に其心の愉快なるを顯はせり。而して是れ實に其無邪氣なる心と、其自得せる德とに由らずんばあらず。彼は實に余の嘗て見たりし道德的幸福の最も完全なる摸範也。而して彼との交友は聖書の外余の嘗て見聞し、閲讀せる何物よりも善く、地上に於ける天國は成熟せる基督敎的敬虔の中に含まれたりとの事を余に敎へたり』と。

彼は又質素儉約なる生活に依りて、常人の堪え難き困難に堪えたりき。彼は最も節儉を重じ、勉めて費を省き用を節し、旅中衣食を給せらるゝの外嘗て信徒を煩はさゞりき。著作は彼の財源にして、メソヂスト派の進歩と共に、其收入も亦漸次增加したりき。然れ共彼は之を以て自己の用に供せず、之を慈善の爲に用ゐたりき。即ち彼は初め一年三十磅を得たりし時、廿八磅を以て自己の生活費に供し、二磅を慈善の資に供したりしが、六十磅を得るに至り、九十磅を得るに至り、百廿磅を得るに至りても、彼は尙廿八磅を以て自己の生活費となして、其質素儉約の生活を改めず、其餘は悉く之を慈善の資に投じたりき。此の如くして彼が其一生に於て慈善の爲めに費し

たりし金額は三萬磅の多きに達したりきと云ふ。彼が生活の如何に質素なりしかは左の逸話に依りて知るべし。稅吏嘗て彼の住せる牧師館の比較的大なるを見て、多くの器皿を有せりと想像し、多額の稅を課せんとせしに、彼答へて云く、『余は倫敦及びブリストルに於て各々二箇の銀製茶匕を有す。是れ余が現在所有せる金屬製器具の凡て也。余は余の周圍にパンを要する許多の貧民の存在する限り此上の器具を求めざるべし』と。何ぞ夫れ其質素なるの甚しきや。

ウエスレーは初め旅行傳道をなすものは婚姻す可らずと思惟したりき。故に彼は嘗て『獨身論』なる一小冊子を著はし、天國の爲めに働かんとする者は、獨身の生活を送るべしとの事を勸告したりき。然れ共彼は遂に其說を變じて、自ら婚姻の生活を送らんと企圖するに至りたりき。吾人は何が故に彼が此の如く其說を改むるに至りしやを知らず。然れ共彼も亦人の有する情を有したり、謹厚なる彼が尙其生涯に艶話を遺したる者恠しむに足らず。不幸にして彼は英國の諺に云へる如く『戀愛の路はいつも滑かに走ることなき』を經驗せり。彼が初めて戀ひ慕ひたる處女は名をベッチー、カーカムと云ひ、彼と彼女との間に取交したる手紙の中には趣味あるもの多し。然るに彼等の幸福は間もなくして終りを告げ、ベッチーは他に婚して、ウエスレーの胸中に失戀の苦を遺したりき。此頃ベンダアブス夫人と稱する寡婦ありしが、彼女は遂にウエスレーの愛を奪へり。彼等の交情は極めて眞面目にして、輕卒なる擧動に出づることなかりしが、奇異にもベンダアブスは外國に旅行して久しく通信を怠りしかば、ウエスレーは自己の愛を輕じたる者として遂に之と絕ちたりき。其後ウエスレーはゾフイア、クリスチアナ、ホップキーと云

へる婦人を慕へり。此婦人は其性格才藝等に於て前に云へる二婦人に及ばざる事遠く、到底ウエスレーの匹に非ざりしかども、彼の病中心を盡して彼を看護せしかば、彼は其親切に對し、唯に單純なる謝意を表するに止まらず、又戀愛の情を動したりき。彼の友人等は深く之を憂へ、百方言を盡して彼を諫め、彼を陷穽の內より救はんとしたりき。彼は愛を解せり、然れ共彼は意志を感情に服從せしむる者に非ず、彼の理性と信念とは遂に制し難き情を制したり。彼自ら其生涯の此危機を叙して云く、『其後幾日間も余は事の如何になりゆくべきやを知らず、又三日四日に至る迄は其決する所を見ざりき、此日神は余に右の眼を拔き出すべきを命じ、余は神の惠に依りてしかせんと決心せり』と。彼又此試練の結果を叙して云く、『去れど余の爲す所寛に過ぎたるが故に神は余を憐れみ、三月十二日の土曜日に友人をして余の爲し得ざりし事を爲さしめたり』と。彼の爲し得ざりし事とは、數日間に緣談熟して、ソフィアが此記臆すべき土曜日にウイリヤムソンと云へる者と婚し、ウエスレーが不適當なる婚姻を爲すの危險の茲に局を結べるを云ふ也。彼がソフィアを知り初めてより一年、ソフィアが結婚の後三月にして彼云く、『神は漸次ソフィアの假物を去りて余の思ひ設けざりし樣を示し、余の救はれたることの大なるを知らしめ給へり、嗚呼余をして心の欲する所に從はしむる勿れ、又余の想像に從はしむる勿れ』と、吾人の欲望の向はんとする所と、信念の命ずる所とが牴觸する時、『主よ聖旨の儘になし給へ』と云ふの勇ある者は福なる哉。

以上の經驗は彼が尙不惑に達せざりし以前に在りき。千七百四十年彼是等の事を思ひ出でゝ、『過ぎし攝理の追懷』と題せる歌を作れり。

中に云く、

浮かれ狂へる若氣の折に
花咲く途に戯れにし時
思はず狂ふ心に驅られ
もがくすべなき捕虜となりぬ
『戀』は征矢射て我宍破り
我胸千々につんざきはてぬ

と。後彼は又グレース、マイレーを娶らんとしたりき。彼女は才藝共に優れて、ウエスレー及び其僣輩には極めて要用なるものなりしが、体質虚弱にして、自己の性格と地位とがウエスレーの其等と甚しく軒輊せるを感じてか、蜜に飽きたる胡蝶の如く、ウエスレーより舞ひ去りて、ペンチットと云へる者と婚し、ウエスレーの胸中に大なる失望を與へたりき。此失望たるやウエスレーの生涯の最大なる試錬にして、彼自ら云く、『グレース、マイレーよ、汝は我心腸を寸斷したり』と。憐むべき彼の苦痛を一層峻酷ならしめたるは、彼が此婦人を娶らんとせし時、弟チャールス等が干渉したりし事なりき。彼は此後久しく婚姻の事を斷念したりしが、千七百五十一年彼の友ペロチットは再び此問題を提出し、ビゼル夫人と云へる寡婦を彼に紹介したりき。四たび失敗したりし彼は其友の助言に從ひ、婚を彼女に求めたりしに、彼の求は容易く承認せられ、婚儀は此の如くして遂に實行せられたりき。而かも此老新夫婦の生活が綢繆纒綿、琴瑟相和するの生活に非ずして、荒凉落漠たる不幸の生活なりしぞ是非もなき。

初めウエスレーのビゼル夫人と婚せんとするや、彼は之に依て聊か

も傳道上の働を制限せらるゝを好まず、故に彼は婚姻に先ち、豫め此事を彼女に告げ、『若し余にして御身と婚姻したるが爲め、說教を少くし、旅行を減せざるを得ざるならんには、余は御身を愛するが故に、再び御身の顏を見ざるべし』と云へりき。不幸にして彼女は彼女が實際に爲し得べかりしよりも以上の事を承認したりき。元來彼女は才智優れたる篤信の婦人なりしが、彼女の有せる凡ての德は一箇の大なる欠點に依りて悉く蔽はれたりき。一箇の大なる欠點とは彼女の有したりし法外の嫉妬心是也。彼女は初めの間はウエスレーの傳道旅行に伴ひたりしが、遂に其煩に堪えず、當初の約束を忘れ、旅行傳道を廢せんことを彼に勸告したりき。ウエスレーは素より家妻の勸告を神の使命に換ふるが如き人物に非ず。故に彼は依然として南船北馬席暖なるに暇あらざりしが、夫人は良人の高尙なる精神を領解すること能はずして、嫉妬猜疑の眼を以て之を見たり。於是彼女は或時は窃に自ら數十哩若くは數百哩の外にウエスレーの後を逐ひ、良人が如何なる人と旅行せるかを偵察し、或時は窃に良人の信書を開封し、又或時は其秘密文書を搜索したり。而して遂に彼女はウエスレーの書簡を盜み出し、之を添削して敎敵の手に送り、新聞紙上に掲げて良人の名譽を傷けんとするに至りき。彼女は一再のみならずウエスレーを棄て去りたることありしが、又た幾ならずして詫言を以て歸り來るを常としたりしに、最後に至り彼女は遂にウエスレーの或文書を携へ、再び歸り來らずとの言を遺してウエスレーの家を去りたりき。而して是れ實に最後の別離なりき。ウエスレーは此の如くして廿年間其妻の劇しき迫害を蒙りたりしが、彼はソクラテスが其惡妻を忍びたりしが如く、能く之を忍びたりき。彼

此時其日記に記して云く、『千七百七十一年一月廿三日、余は今日に至る迄何の故たるを知らず、妻は再び歸り來らずとて、ニウカッスルに赴きたり。余彼女を棄てしに非す、余彼女を離別したりしに非す、余は再び彼女を迎へざるべし』と。サウセーの云ふ處に依れば、彼女は此離別の後十年間生息したりき。而して彼女の墓誌には彼女を以て篤信の婦人、やさしき母、親切なる友也と記したりしかども、妻としての德に就ては何事をも言はざりしと云ふ。スチーブンスはウエスレーの德を稱讃して云く、『彼女は廿年間根據もなき疑惑と、堪え難き煩累とを以て彼を惱ましたりき。而して彼が此長き家庭の困難の間、嘗て其公生涯に頓挫を與へず、其勢力と成効の一點一劃をも失はざりしは、亦以て彼の性格の偉大なるを証すべし』と。彼の敎敵が嘗てウエスレー夫人の手より出でたる僞書を新聞紙上に掲載せんとするの報一たびチャーレスに達するや、彼大に驚き倉惶馳せてウエスレーの許に來り、其書簡の紙上に顯はれざるやう盡力すべしとの事を熱心に勸告したりしに、ウエスレーは毫も驚かず、答へて云く、『余が余の安易と余の時間と余の生命とを神に献げし時、豈余の名譽のみを除外せんや』と。彼は此の如き事に依りて彼の名譽の害せられ、神の事業の妨げらるべきものに非ざるを信じたりき。然り、彼は實に此の如き信仰に依りて、此堪え難き試錬に堪えたりし也。

千七百五十三年の秋、即ちウエスレーが五十一歳に達したりし時、彼は過勞の結果重き病に罹りたりき。醫師は其肺結核に變せんことを恐れ、全く業務を廢して、靜閑の地に退き、靜養すべきを命じたりき。敎會は之が爲めに驚き、祈禱を捧げて其回復を祈りたりしに、